

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報2

— 元岡・桑原遺跡群発掘調査 —



2003

福岡市教育委員会

序

福岡市は大陸に近いという地理的条件から、文化の流入拠点、大陸との貿易基地として古くからの歴史を有しています。現在は歴史的、地理的に関係の深いアジアとのつながりを重視し、「アジアの交流拠点都市」を目指し、アジアの様々な地域との交流や学術・文化などの交流を行っています。

現在、九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、本市の多核連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っています。

本書は九州大学統合移転に伴い、1999年度から2002年度に行われた元岡・桑原遺跡群の確認調査及び発掘調査の概要を報告するものです。本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に調査を受けた福岡市土地開発公社、調査にご協力いただいた九州大学及び都市整備局大学移転対策部、並びに元岡地区、桑原地区の地元の方々をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田征生

例言

1. 本書は九州大学統合移転に伴い1999年度から2002年度に行われた確認調査および発掘調査の概要である。それ以前の調査の概要については市報告書第693集(2001)で報告している。なお、今回の事業に伴う調査の報告書は随時刊行していく予定である。
2. 元岡・桑原遺跡群は遺跡略号をMOTとし、確認調査(金尿古墳、石ヶ原古墳を含む)を1次調査とし、以後、調査順に次数を付けた。なお、桑原石ヶ原古墳群についてはこれらに含めず、KIMの遺跡略号とした。
3. 本書に掲載した木簡、屈木等は記録類を含め、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。
4. 本書の執筆・編集は各担当者が行い、分担は目次に記した。

目次

1. 遺跡の位置(菅波正人).....	1
2. 調査組織(菅波).....	1
3. 調査経緯(松村道博).....	2
4. 調査の概要	
第18次調査(吉留秀敏).....	5
第19次調査(松村).....	9
第20次調査(菅波).....	10
第21次調査(松浦一之介).....	22
第22次調査(松村).....	23
第23次調査(二宮忠司).....	24
第24次調査(松村・濱石哲也).....	26
第25次調査(早野忠美・松浦).....	29
第26次調査(二宮).....	33
第27次調査(二宮).....	36
第28次調査(塚山洋).....	39
第29次調査(星野).....	40
第30次調査(二宮).....	41
5. おわりに(二宮).....	42

挿図目次

Fig.1 元岡・桑原遺跡群位置図(1/50,000)	
Fig.2 元岡・桑原遺跡群調査地位置図(1/15,000).....	3
Fig.3 第18次調査全体図(1/1,000).....	6
Fig.4 第18次調査遺構実測図(1/60).....	7
Fig.5 第18次調査出土遺物実測図(1/4, 1/2).....	8
Fig.6 第19次調査全体図(1/600).....	9
Fig.7 第20次調査全体図(1/1,000).....	11
Fig.8 第20次調査出土遺物実測図(1/2, 1/3).....	15
Fig.9 第20次調査出土木簡実測図1(1/3, 1/4).....	18
Fig.10 第20次調査出土木簡実測図2(1/3).....	19
Fig.11 3号墳石室実測図(1/80).....	22
Fig.12 第22次調査全体図(1/400).....	23
Fig.13 第23次調査(確認)と試掘調査地点(1/10,000).....	25
Fig.14 第24次調査全体図(1/400).....	27
Fig.15 出土土器実測図(1/4).....	28
Fig.16 桑原古墳群A群分布図(1/1,000).....	29
Fig.17 2号墳石室実測図(1/100).....	30
Fig.18 3号墳石室実測図(1/100).....	31
Fig.19 4号墳石室実測図(1/100).....	31
Fig.20 5号墳石室実測図(1/100).....	32
Fig.21 6号墳石室実測図(1/100).....	32
Fig.22 7号墳石室実測図(1/100).....	32
Fig.23 第26次Ⅱ区調査全体図(1/400).....	35
Fig.24 第27次調査全体図(1/400).....	37
Fig.25 SC16 焼上、炭化物出土状況実測図(1/80).....	38
Fig.26 SC16 実測図(1/80).....	38
Fig.27 第28次A区全体図(1/400).....	39
Fig.28 元岡古墳群N群分布図(1/1,000).....	40
Fig.29 第23、30次調査全体図(1/1,500).....	41

付図目次

付図1 元岡・桑原遺跡群遺構分布図1(1/2,000)	
付図2 元岡・桑原遺跡群遺構分布図2(1/2,000)	
付図3 元岡・桑原遺跡群遺構分布図3(1/2,000)	
付図4 元岡・桑原遺跡群遺構分布図4(1/2,000)	

目 次

表紙 第20次調査出土大元元年銘木簡

裏表紙 調査地点透景（南から）

Ph.1	石ヶ元古墳群墳丘段整備状況（北から）	2
Ph.2	調査区全景（北から）	5
Ph.3	SE286 近影（西から）	5
Ph.4	SX111 朽木出土状況（南から）	5
Ph.5	調査区全景（北から）	9
Ph.6	調査区周辺透景（南から）	12
Ph.7	調査区透景（南から）	12
Ph.8	調査区透景（北から）	12
Ph.9	SX044 周辺（西から）	12
Ph.10	竪穴住居跡分布状況1（西から）	12
Ph.11	竪穴住居跡分布状況2（西から）	12
Ph.12	倉庫分布状況（西から）	12
Ph.13	SX001 完掘（東から）	12
Ph.14	SX001 築堤排水施設（北から）	13
Ph.15	SX001 出土彫木製品（南から）	13
Ph.16	SB041、042（北から）	13
Ph.17	SB030 - 034（北から）	13
Ph.18	SX044 出土建築部材（北から）	13
Ph.19	SX044 出土須恵器（南から）	13
Ph.20	SC050 完掘（北から）	13
Ph.21	SC069 竈内土師器出土状況（南から）	13
Ph.22	第20次調査出土木簡赤外線写真	17
Ph.23	1 - 3号墳全景（東から）	22
Ph.24	2号墳石室全景（西から）	22
Ph.25	調査区西半分全景（西から）	23
Ph.26	D - 8 - 1地点（東から）	24
Ph.27	D - 8 - 2地点（東から）	25
Ph.28	C - 2地点全景（北から）	25
Ph.29	E - 2 - 1地点全景（北東から）	25
Ph.30	E - 2 - 1地点伏焼土層（北西から）	25
Ph.31	調査地点全景（上空から、2002年9月）	28
Ph.32	調査区全景（西から）	28
Ph.33	3号製練炉（西から）	28
Ph.34	12号製練炉と裾部の鉄滓層積（北から）	28
Ph.35	D - 3・4区竪穴住居群（北東から）	28
Ph.36	G・II - 4区下層 SC10とSB1（南から）	28
Ph.37	2号墳遺物出土状況（南西から）	30
Ph.38	桑原古墳群A群墳丘遺存状況（南から）	30
Ph.39	3号墳石室全景（南西から）	31
Ph.40	4号墳副室石（南西から）	31
Ph.41	5号墳遺物出土状況（南西から）	32
Ph.42	8号墳遺物出土状況（南東から）	32
Ph.43	7号墳石室全景（南西から）	32
Ph.44	第26次調査空堀（北東から）	33
Ph.45	第26次調査全景（東から）	33
Ph.46	第26次調査全景（東から）	34
Ph.47	Ⅱ区東側（東から）	34
Ph.48	Ⅱ区古墳時代竪穴住居跡（北から）	34
Ph.49	Ⅱ区石積溝渠全景（南西から）	34
Ph.50	1号墳全景（南西から）	34
Ph.51	Ⅱ区掘立柱建物（北から）	34
Ph.52	Ⅱ区掘立柱建物（北から）	34
Ph.53	Ⅱ区掘立柱建物（北から）	34
Ph.54	第27次調査空堀（東から）	36
Ph.55	第27次調査空堀（東から）	36
Ph.56	第27次調査空堀（西北から）	36
Ph.57	竪穴住居跡全景 SC06 - 14（西から）	38
Ph.58	SC01、02全景（北から）	38
Ph.59	SC16全景（北から）	38
Ph.60	SC16完掘状況（北から）	34
Ph.61	第28次A区全景（東から）	39
Ph.62	元岡古墳群N群現況全景（北から）	40
Ph.63	第23次、30次調査全景（東から）	41
Ph.64	第30次調査全景（東から）	41
Ph.65	伏焼土層全景（北から）	41

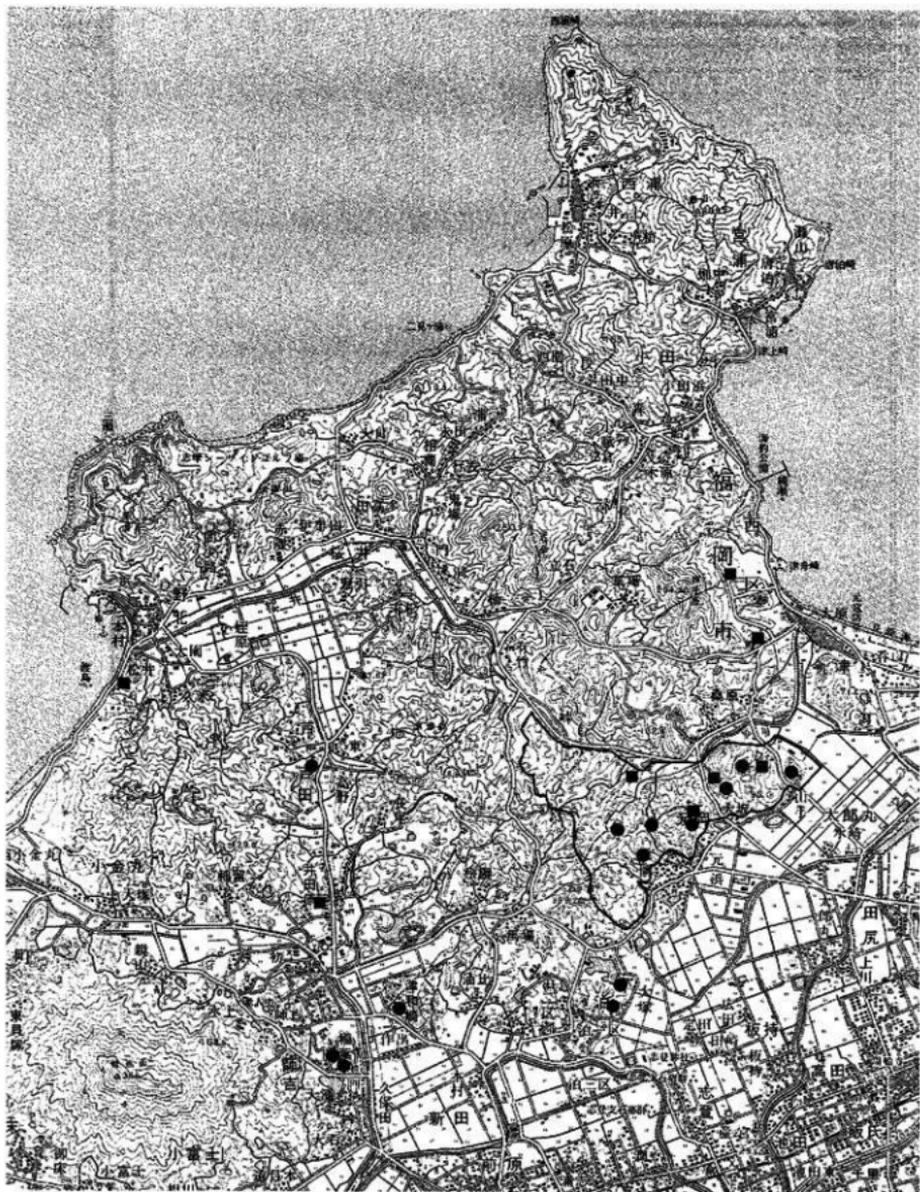


Fig.1 元岡・桑原遺跡群位置図(1/50,000)

(事業地は太線で囲んだ部分。●は前方後円墳、■は製鉄関連遺跡)

1. 遺跡の位置

元岡・桑原遺跡群は福岡市の西端にあたり、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯にある。丘陵は小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入りこむ。遺跡は丘陵上や枝分かれた谷部に立地する。行政的には福岡市西区元岡、桑原に所在する。この地域はこれまで都市化の影響が少なく、調査の実施例は多くなかった。近年、新西部理立て場の建設、開場整備等によって調査が行われ、遺跡の状況が徐々に判明してきた。それでは時代ごとの遺跡の概要を見ていく。

縄文時代の遺跡では福岡市では数少ない貝塚が見られる。桑原飛橋貝塚は道路拡張工事に伴って調査が行われ、主に縄文時代後期の土器や石器、貝輪、骨製品等が多量に出土した。また、貝層中に計6体の埋葬人骨が検出された。同時期の遺跡に県指定史跡の元岡瓜尾貝塚がある。大原D遺跡では埋め立て場建設に伴う調査で、縄文時代草創期から晩期に至る遺物が多量に出土した。中でも4次調査では草創期の焼土住居が検出され、該期の住居構造を考える重要な成果が得られた。

弥生時代の遺跡では海岸部に長浜貝塚、今津貝塚が展開する。丘陵上では小蔭遺跡（大原B遺跡）がある。病院建設に伴って調査が行われ、弥生時代中期後半から後期後半に至る多量の土器が出土した。土器のなかには鹿の絵を描いた絵画土器もある。今津の呑山遺跡では今山遺跡と同様に玄武岩の露頭があり、弥生時代の前期末には石斧製作が行われていたと考えられる。埋葬遺構は小田支石墓が古くから知られるが、この地域では明確な埋葬遺跡は少ない。祭祀遺物では唐沱の沖合で広形銅矛が引き上げられている。

古墳時代では山麓部に群集墳が形成されるが、調査例も少なく、状況は不明瞭である。また、集落遺跡は先述の大原A遺跡や大原B遺跡で小規模なものが発見されている程度である。隣接する前原市では事業地南側に御道具山古墳、泊大塚古墳が、志摩町では事業地西側に開1号墳、権現塚、稲葉1号墳、稲葉2号墳等の前方後円墳がある。

古代では当該地域は志麻（嶋）郡に属する。文献では正倉院に現存する最古（大立二年）の戸籍の筑前岡嶋郡川辺里戸籍がある。遺跡では海岸で良好な砂鉄が得られることから製鉄遺跡が多く分布する。大原A遺跡や大原D遺跡では8～9世紀の製鉄炉や鍛冶炉、多量の鉄滓が検出された。また、半島の西側の八熊製鉄遺跡でも8世紀後半の製鉄炉や鍛冶炉の他、木炭窯も検出された。当地域が鉄生産に関して重要な役割を果たしていたことを伺うことができる。

2. 調査組織

調査組織は平成12年度以降のものを掲げた。

調査委託 福岡市土地開発公社

調査主体 福岡市教育委員会

教育長 生田征生

文化財部長 堺徹 柳田純孝(前任)

調査庶務 文化財整備課

文化財整備課長 平原義行 上村忠明(前任)

管理係長 市坪敏郎 井上和光(前任)

管理係 川村浩旭 中谷圭

岩塚淳美(前任)

調査担当 大規模事業等担当

課長 二宮忠司

主査 濱石哲也 松村道博(前任)

菅波正人 屋山洋 星野恵美

古留秀敏 松浦一之介(前任)

調査員 石橋忠治 大庭友子 小杉山大輔

西村直人 濱石正子 水崎り

撫妻久美子

調査調整 都市整備局大学移転対策部

3. 調査経過

平成6年に用地を取得し、踏査、試掘調査を行い、平成8年後半から始まった発掘調査も今年度で32ヶ所目の調査となった。この間、平坦な道ではなく様々な問題が持ち上がり苦慮したことも度々であった。主な前方後円墳及び石ヶ元古墳群の一部が緑地として保存され、発掘調査の結果特に重要と思われる12次、20次調査地点が現状保存される方向で話が進められているのは幸いである。調査にいたる経過及び17次調査までの概要については既報に述べられているので、ここでは平成11年度後半に調査を開始した18次調査以降から九州大学が福岡市土地開発公社から再取得したG地区の32次調査までの計14ヶ所の経過について述べる。

平成11年度後半は第1工区であるC、D地区の一部を除きほぼ終了したためB地区の調査を開始する。18次調査は桑原古墳群A群と中世山城の戸山城の丘陵に扶まれ、西方に開く谷部に占地する。主に南、北の傾斜面を造成して遺構を構築している。古墳時代から中世に至る遺構が見られるが、なかでも7～8世紀の遺構は何段にも石を積み上げた平坦面に掘立柱建物の倉庫群や製鉄遺構を設けている。

平成12年度は第2工区のB地区を集中して調査を行う。まず20次調査地点である。試掘調査で弥生時代後半から古墳時代前半に至る遺物が大量に出土することから相当な調査期間が見込まれたので、最初に着手し順次B地区の他の地点を実施した。また平成11年度に調査した12次調査では密集した状態で数多くの製鉄炉が確認され、重要な遺跡であることが判明した。文化庁・九州大学・福岡市教育委員会が協議し、移転用地内の全体の製鉄遺跡のあり方を把握してから保存を決めると考えが示され、試掘調査で製鉄遺構が予想される地点の確認調査を6月から実施することになった(23次調査)。鉄滓が採集されていたB-4、B-6地点については本調査(22次、24次)を実施することとなった。22次調査では廃滓土坑、



Ph.1 石ヶ元古墳群墳丘仮整備状況(北から)

24次調査では10基前後の製鉄炉・鍛冶炉が検出された。また20次調査では記年銘(大寶元年・延暦四年)木簡や帯金具、硯等が出土し、一般集落とは明らかに異なる遺跡と判明。九大内部で保存する方向で検討がなされる。

平成13年度は前年に引き続きB地区の調査を行う。18、20、24次調査は継続。新たに桑原古墳群A群(25次)に着手。20次調査地点は基本的に保存されることになり、その範囲を絞り込むため、その南西に位置するB-1地点の確認調査(26次調査)を行い、古墳時代から古代の遺構を確認した。

調査した古墳で緑地に保存されることになっていった石ヶ元古墳群は発掘調査後一部埋め戻しがなされていたが、大部分はそのままの状態であった。将来的には保存が決まっている前方後円墳とともに整備され、広く市民に公開されようが、それまでの間、崩落する危険性がある石ヶ元古墳群については、美観の問題もあり九州大学で仮整備が行われた。(上写真)

平成14年度は20次、24次、27次、28次調査は継続で、元岡古墳群N群の調査(29次)に着手する。一方、後半期より九州大学が再取得したG地区の調査(31次、32次)が始まる。20次、27次調査では古墳時代の集落が確認された。24次調査で確認された製鉄炉は奈良時代のものであることが分かった。

九州大学統合移転地内(元岡・桑原遺跡群)発掘調査一覧

遺跡名	担当者	所在地	調査年月日	調査面積又は 古墳基数	検出遺構	調査後の処置
(確認調査)						
桑原石ヶ元古墳群	松浦	大字桑原字石ヶ元	H.8.11.11~H.10.10.21	19基	円墳	保存
桑原金塚古墳	久住	大字桑原字金塚	H.8.8.20~H.8.11.29	1基	前方後円墳	保存
元岡石ヶ原古墳	松浦	大字元岡字石ヶ原	H.8.8.27~H.8.11.29	1基	前方後円墳	
(発掘調査)						
元岡・桑原遺跡群	池崎・小林	大字元岡・桑原	H.9.12.1~H.10.10.31		試掘	
桑原石ヶ元古墳群	松浦	大字桑原字石ヶ元	H.9.12.1~H.10.10.31	12基	円墳	調査後造成
第2次	久住	大字桑原字柿ヶ元	H.8.11.11~H.9.3.25	3,007㎡	古墳時代~古代遺、土坑、水田	調査後造成
第3次	菅波	大字元岡字瓜尾	H.8.11.19~H.11.2.22	3,500㎡、古墳1基	縄文時代石組炉、弥生時代住居址、円墳	調査後造成
第4次	池崎	大字元岡字石ヶ元	H.8.12.1~H.10.3.31	1,219㎡	古代~中世孤立柱建物・溝	調査後造成
第5次	松村	大字元岡字石ヶ元	H.10.4.27~H.10.6.23	2,500㎡	古代土壇・包含層	調査後造成
第6次	松村	大字桑原字石ヶ元	H.10.6.30~H.10.8.28	2,800㎡	古墳時代包含層	調査後造成
第7次	古留	大字元岡字池ノ浦	H.10.5.6~H.11.6.11	7,500㎡	古墳時代~古代住居址・掘立柱建物、池伏遺構、製鉄炉	保存
第8次 (元岡古墳群M群)	松村	大字元岡字瓜尾	H.10.8.16~H.10.12.25	古墳1基	円墳	調査後造成
第9次	松浦	大字元岡字池ノ浦	H.10.11.2~H.10.12.10	150㎡	弥生時代住居址	調査後造成
第10次	松浦	大字桑原字池ノ浦	H.11.1.6~H.11.3.31	1,336㎡	古代~中世包含層	調査後造成
第11次	松村	大字桑原字池ノ浦	H.11.1.6~H.11.3.20	1,850㎡	古墳時代~古代土壇、包含層	調査後造成
第12次	菅波	大字桑原字覆形	H.11.4.1~H.12.3.28	5,500㎡	古代製鉄炉	保存
第13次	松浦	大字元岡字小坂	H.11.4.12~H.11.9.28	古墳3基	前方後円墳1基、円墳2基	調査後造成
第14次	松村	大字桑原字池ノ浦	H.11.4.22~H.11.7.22	1,200㎡	古代包含層	調査後造成
第15次	古留	大字桑原字覆形	H.11.6.11~H.11.9.28	3,500㎡	古代包含層、中世水田	保存
第16次	松村	大字桑原字牛切	H.11.8.2~H.11.11.10	2,500㎡	古代包含層	調査後造成
第17次 (元岡古墳群B群)	松浦	大字元岡字池ノ浦	H.11.8.10~H.11.12.8	古墳2基	円墳	調査後造成
第18次	古留	大字桑原字別府	H.11.10.15~H.11.4.25	16,800㎡	古墳時代~古代住居址、掘立柱建物、池伏遺構、製鉄炉	調査後造成
第19次	松村	大字桑原字牛切	H.11.11.18~H.11.12.24	3,000㎡	古代包含層	調査後造成
第20次	菅波	大字桑原字戸山	H.12.4.5~	17,000㎡	古墳時代住居址、古代孤立柱建物、製鉄炉	内、15,000㎡分を保存予定 製鉄炉
第21次	松浦	大字桑原字石ヶ元	H.12.4.4~H.12.9.21	2,900㎡、古墳3基	石ヶ元古墳群円墳1基、桑原古墳群A群1基	調査後造成
第22次	松村	大字桑原字牛坂	H.12.4.13~H.12.10.20	3,890㎡	古代孤立柱建物、製鉄関連遺構	調査後造成予定
第23次	二宮	大字元岡・桑原	H.12.6.5~H.12.12.25	9,106㎡	確認調査	7,300㎡は緑地保全地区(保存)
第24次	松村・濱石	大字桑原字金塚	H.12.8.21~	5,500㎡	古墳時代住居址、古代製鉄関連遺構	調査中
第25次 (桑原古墳群A群)	松浦・早野	大字桑原字別府	H.12.12.31~H.13.11.30	古墳7基	円墳	調査後造成予定
第26次	二宮	大字桑原字戸山	H.13.4.6~H.13.11.30	5,487㎡、古墳1基	古墳時代住居址、円墳、古代孤立柱建物	保存3,442㎡
第27次	二宮	大字桑原字戸山	H.13.12.1~H.14.8.20	4,495㎡	古墳時代住居址	遺物留置の変更による保存、1,600㎡
第28次	塚山	大字元岡字池ノ浦	H.14.2.1~H.14.7.4	2,200㎡	古代~中世包含層	調査後造成
第29次 (元岡古墳群N群)	早野	大字元岡字石ヶ原	H.14.4.5~	古墳9基	円墳	調査中
第30次	二宮	大字桑原字牛切	H.14.8.1~H.14.9.30	2,450㎡	古代包含層	調査後造成予定



原 圖
 Fig.2 元圖・秦原遺跡調査地位置圖 (1/15,000) (事業地は太線で囲った部分)

4. 調査の概要

第18次調査

調査地点は、大原川の南側に開析された幅約100m、奥行き300m程の小谷内にある。谷を挟んで西側の尾根には後期群集墳である桑原古墳群B群（第25次）、東側の尾根には中世山城である戸山城がある。調査は現在の県道より東側を対象とし、谷奥部全体と谷開口部の中央～東斜面の範囲である。かつて宅地、水田、畑、果樹園などが造られ、調査前は竹林、雑木林となっていた。遺跡はこの谷の地下1～6mに埋没していた。

調査は排土処理のため4区に分け、時期別に5面に区分して遺構の検出を進めた。

第1面は中世末～近世の遺構であり、道路状遺構、貯水池、井戸、水路などがあつた。遺物には国産・輸入陶磁器類、土器類などがある。

第2面は古代末～中世前期の遺構であり、掘立柱建物9棟、井戸3、木棺墓、土坑、溝、水田などがある。主な遺構は谷開口部東斜面にある。遺物には国産・輸入陶磁器類、土器類、金属製品、石製品、木製品などがある。

第3面は古代後期（奈良時代）の遺構であり、掘立柱建物17棟、製鉄炉7基、鍛冶炉、井戸、池、陸橋、土坑、溝などがある。SR059は小型の精錬炉、SR221は鍛冶炉である。SE422は石組井戸であり、谷頭部に設けられている。遺物には須恵器環蓋（4、7）に墨書「官」「広刀自」がある。他に土師器類、金属製品、石製品、木製品などがある。

第4面は古墳時代後期～古代前期（飛鳥時代）

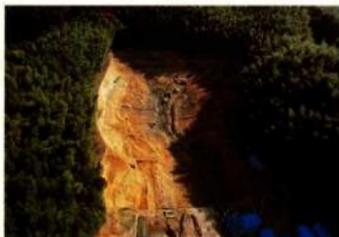
の遺構であり、掘立柱建物48棟、竪穴式住居13軒、井戸、池、石組遺構、石敷遺構、土坑、溝などがある。この遺構面はさらに二段階に細分される。掘立柱建物は斜面を造成し、溝、石垣などを伴う。二間二間、一間二間、一間一間などの倉庫が多く、SB280のように柱の遺存する例もある。竪穴式住居は斜面にあり遺存状況は悪い。SC389は西側壁に石製支脚を有する竈が付設される。SE286は石組井戸であり、谷頭部に設けられ、周囲に石敷遺構が伴う。遺物には須恵器（1～3）、土師器類、土器類、金属製品、石製品（12、13）、木製品などがある。石製品には紡錘車（12）、椎（13）、木製品には木筒（8）、土器製作工具（9、10）、鞍の部材である居木（11）などがある。

第5面は弥生時代以前の包含層であり、旧石器時代後期、縄文時代草創期、同後期、弥生時代中期の遺物が出土した。14は縄文時代草創期の黒曜石製の細石刃核である。

古代において谷奥を中心に大規模な造成を伴う倉庫群が造られ、木筒、椎、墨書土器や特殊な木製品が多数出土した。遺跡構造上類似した7次調査とともに何らかの公的施設と考えられる。



Ph.3 SE286近影（西から）



Ph.2 調査区全景（北から）



Ph.4 SX111 郡木出土状況（南から）



Fig.3 第18次調査全体図(1/1,000)
 トーンは石敷遺構などを示す。黒は2・3面、朱は4面である。

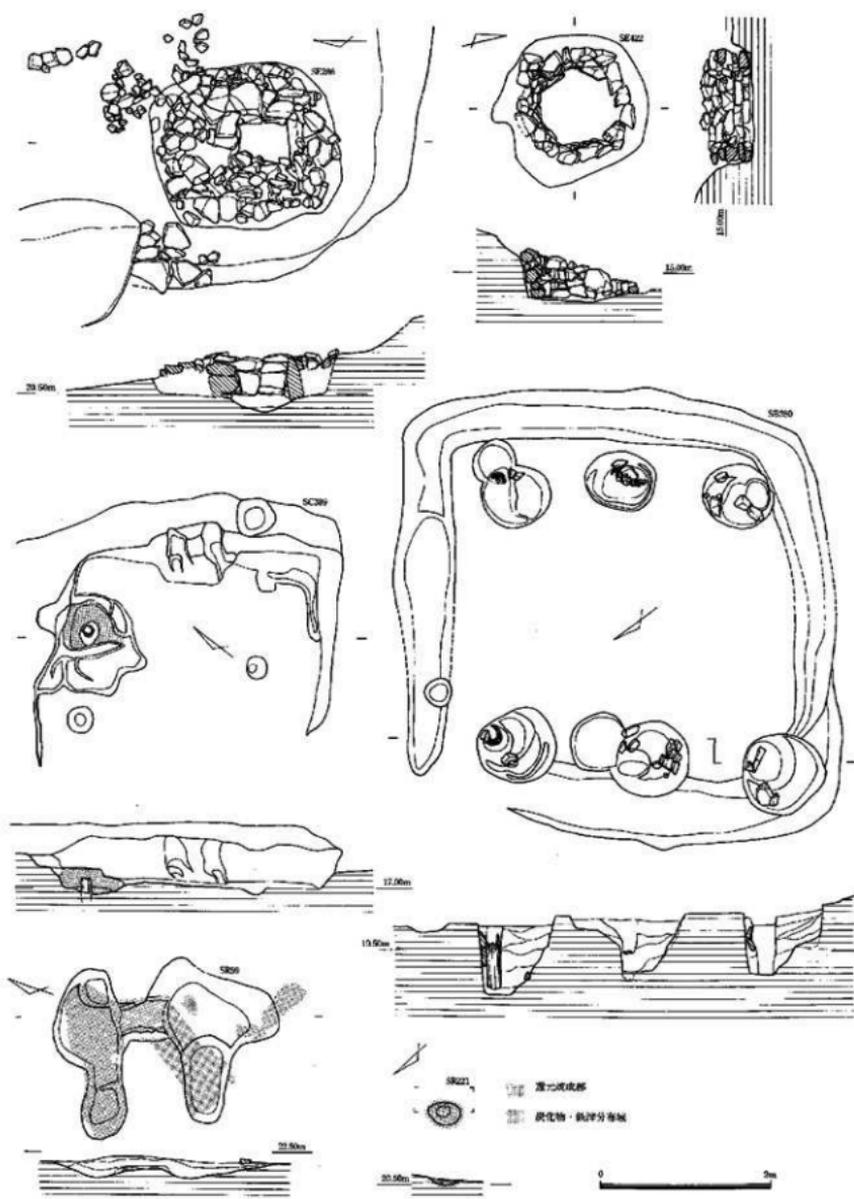


Fig.4 第18次調査遺構実測図 (1/60)

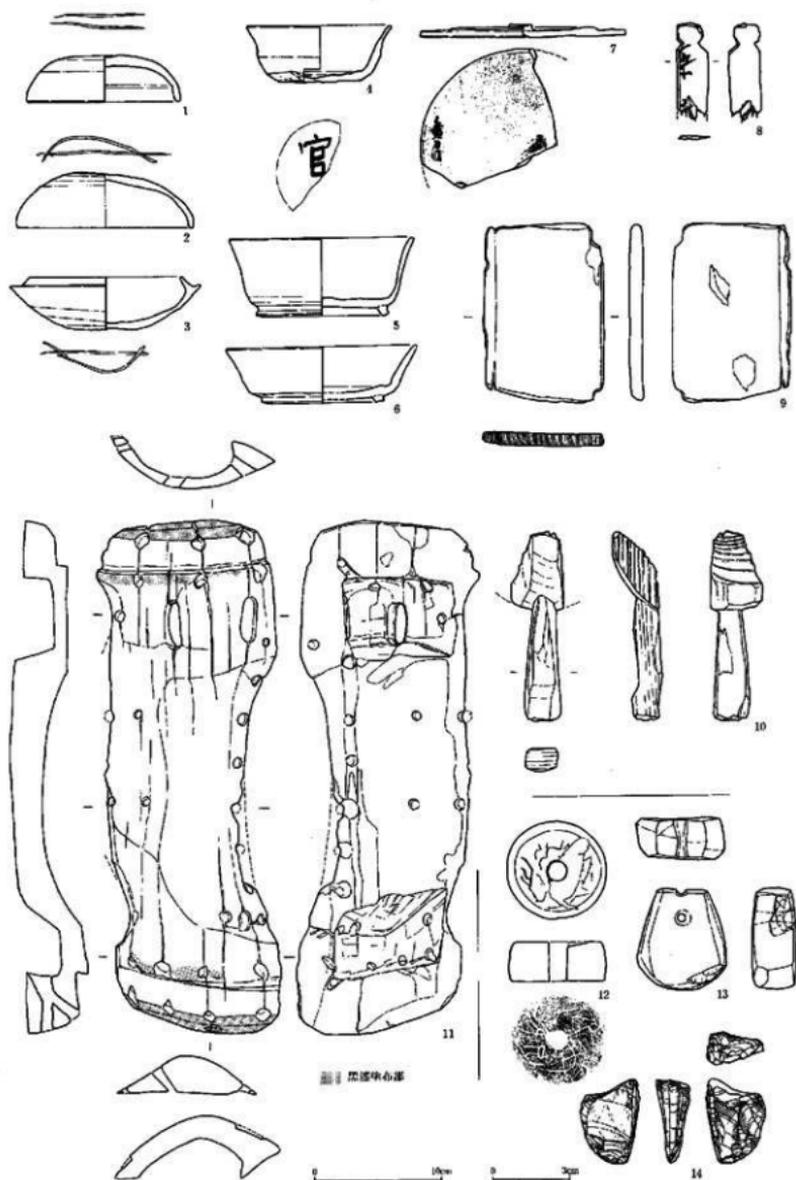


Fig.5 第18次調査出土遺物火湖図 (1/4、1/2)

第 19 次調査

調査地点は移転用地のほぼ中央部、大原川の最上流部にあたり、尾根を挟んで16次調査地点の東側に位置する。周囲は高い丘陵に囲まれ、幾つもの浅い谷が入り込み大原川へ注ぐ。標高42～45mを測り、西側から東へ開く浅く、幅広い谷部にあたる。調査区は南北を低位な丘陵に扶まれ、中央に低い尾根部が伸び、丁度「W」字状を呈する。現況は畑地で開墾の際、中央部の丘陵裾を階段状に造成しているが、その西側は緩やかな傾斜で自然の状態を保っている。

大原川の西側には12次調査地点から南に延びる丘陵が続き、その東側丘陵麓には製鉄関連遺構(D-6)が予想されていた。今回の調査はその東側丘陵の鋸歯状に開析された谷の南端部にあたり、試掘調査では木炭、焼土が出土している。試掘調査では土師器などが出土し古代の集落が予想されていた。調査の結果、東側の丘陵斜面から径10～30cmのピットが検出された。遺物は土師器の細片がいくつか出土しただけである。平坦面も

無く、建物の復元はできない。谷部の土層は1～2.5mは基盤層の花崗岩が風化し細粒化した土壌の堆積でその下に灰褐色土、茶褐色土、暗褐色土、黒褐色土となる。遺構は確認できず遺物は暗褐色土から底部糸切の土師器皿の破片が数点出土している。以上のことより古代の集落、生産遺構の存在は考えられない。



Ph.5 調査区全景(東から)

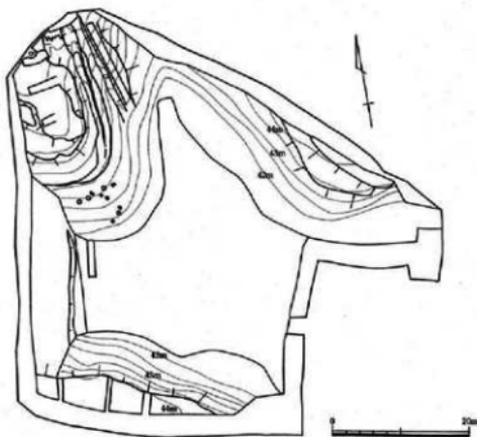


Fig.6 第19次調査全体図(1/600)

第20次調査

調査地点は事業地の東側(B-2)にあたり、別所山の東側に位置し、北東方向に開口する、幅約50m程の谷部に当たる。遺構は谷部西側斜面の整地層上面で古代、その下層で古墳時代のものを検出した。遺構面の標高は8~10mを測る。調査は平成12年度から実施し、総調査面積約15,000㎡となる。現在までに検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡80軒 α 、掘立柱建物、溜池状遺構、土坑他、古代(奈良時代~平安時代)の掘立柱建物32棟 α 、池状遺構、製鉄炉、鍛冶炉、土坑他となる。遺物は各遺構から須恵器、土師器等の土器類、池状遺構から木簡をはじめとする木製品、鉄鏃、刀子等の鉄製品などが多量に出上した。遺物の総量はコンテナ約2000箱程度になる。

古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は西側の丘陵斜面から谷部にかけて、竪穴住居跡を80軒あまり検出した。古代の整地層下層にも遺構が確認されており、更に20~30軒の竪穴住居跡が予想される。竪穴住居跡は古墳時代前期から7世紀まで見られ、長期にわたる集落であることが分かった。竪穴住居跡は奈良時代のものは確認されておらず、集落城は別の場所に移ったと考えられる。また、調査区北側中央で幅20m、長さ50mを超えるSX044を検出した。この遺構は堆積状況から常に水が溜まっていたと考えられ、南から延びてくる谷部から枝分かれた狭い谷の下流に堰を設けた溜池状の遺構と考えられる。SX044からは古墳時代前期~後期の各時期の土器、木器(農耕具、建築部材等)が多量に出土した。また、完形の土器(土師器の小型丸底壺、須恵器環)や子持ち勾玉、滑石製の小玉や太刀等が出土しており、各時期の水場の祭祀が行われていたと考えられる。

古代の遺構・遺物

古代の主な遺構は池状遺構SX001と掘立柱建物(倉庫)である。倉庫群は東側の浅い谷部と西側の丘陵に挟まれた幅約30m程の整地面に上

造られており、南側についてはSX001より上流には配置されない。北側は削平のため、不明確だが、南北長60m程度の範囲に約30棟余りが分布する。遺構の配置状況などから東側の谷部分を堰きとめて流路を更に東側にずらし、西側の丘陵裾を削ってそれ以前の居住域を埋め立てて倉庫群を配置したと考えられる。倉庫群を区画する溝や欄等を検出されていないが、倉庫群はある程度柱筋を揃えて、2~3の列状を呈している。柱筋の方向や柱穴の切り合い関係から同時並存ではなく、数時期に亘るものと考えられる。倉庫の構造・規模は2×2間の総柱建物、床面積約9~15㎡のものが大半である。

池状遺構SX001は谷を幅約3m、長さ約14mの築堤により堰きとめたもので、長さ約35m、幅約20m、深さ約50~80cmを測る。築堤の中央部分では木材を埋め込んだ排水用の施設を確認した。池状遺構の性格としては前述した倉庫群に関わるものと考えられる。また、池状遺構からは多数の土器、木製品(工具(刀子柄)、農具(鋤、杵)、紡織具(糸巻、紡錘車、機打具)、服飾具(櫛、下駄)、容器(掬物、刻物、曲物桶、蓋板、椀)、食事具(杓子)、遊戯具(琴柱)等)、鉄製品(銅製品(櫛、飾り金具等)、鉄鏃、鉄刀、箱金具、刀子、釘等)が出土したが、この中には舟形木製品や斎中等の祭祀具があり、この場所で何らかの祭祀が行われていたと考えられる。池状遺構の存続時期は出土土器や木簡紀年銘(大宝元(701)年、延暦四(785)年)から8世紀を前後する時期から約100年間と考えられる。倉庫群に関してもその時間幅の中で捉えられる。

調査区西側の丘陵西側斜面では古代の製鉄炉3基、鍛冶遺構数基、焼上坑数基を検出した。時期は未確定だが、連の倉庫群より新しく位置づけられる。これまで製鉄遺構は7次、12次、18次、24次などで多数検出されているが、この地点でも確認できたことで、この時期には各所で製鉄関連作業が行われていたことが分かった。

遺物は官衙に関連する遺物を中心に掲載した。1はSX044の上層の7世紀後半~8世紀にかけて

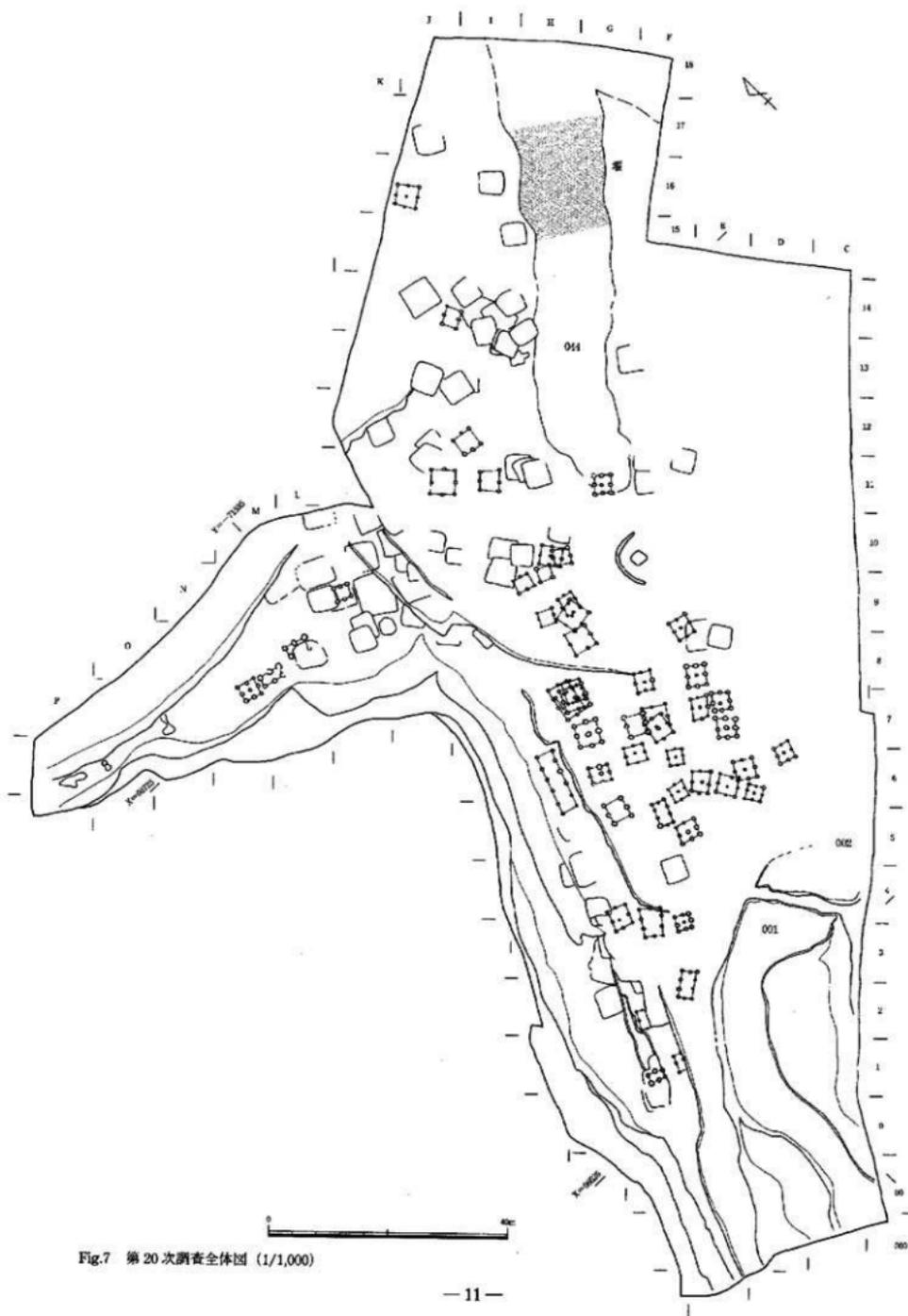


Fig.7 第20次調査全体図 (1/1,000)



Ph.6 調査区周辺遠景 (南から)



Ph.10 竪穴住居跡分布状況1 (西から)



Ph.7 調査区遠景 (南から)



Ph.11 竪穴住居跡分布状況2 (西から)



Ph.8 調査区遠景 (北から)



Ph.12 倉庫分布状況 (西から)



Ph.9 SX044 周辺 (西から)



Ph.13 SX001 完掘 (東から)



Ph.14 SX001 築堤排水施設 (北から)



Ph.18 SX044 出土建築部材 (北から)



Ph.15 SX001 出土舟形木製品 (南から)



Ph.19 SX044 出土須恵器 (南から)



Ph.16 SB041、042 (北から)



Ph.20 SC050 完器 (北から)



Ph.17 SB030～034 (北から)



Ph.21 SC069 竈内土師器出土状況 (南から)

の層から出土した緑釉陶器である。大きき約3cm四方の破片で、器形の特徴から蓋の天井部分と考えられる。器面には濃緑色の釉薬がかかり、外面には3条、2条一単位の沈線が巡る。胎土は灰白色を呈し、やや硬質である。共存する遺物の時期や形態的な特徴から統一新羅のものと考えられる。器形としては大阪市立東洋陶磁美術館所蔵李乘昌コレクションの盒子に類似する。国内での新羅産緑釉陶器の出土例は奈良県明日香村石神遺跡(坏)、大宮大寺跡(蓋)、豊浦寺跡(長頸甕)、奈良市平城宮東院(甕)、大阪市東中学校跡地(長頸甕)等の畿内地域その他、千葉県富津市野々間古墳(長頸甕、蓋)、宇都宮市前田遺跡(蓋)に見られるが、九州地域での出土例は初例と考えられる。

2はSX044の上層の7世紀後半～8世紀にかけての層から出土した獣脚甕である。脚部は欠損しているが、脚部の剥落部分の位置から四脚と推測される。外縁径16.8cm、陸部径10.8cmを測る。甕はこれ以外に亀形把手付の中空円面甕、転用甕がある。3～10は墨書土器である。池状遺構001及び流出部より出土した。墨書土器は現在80点程を確認している。大半が須恵器坏身、坏蓋である。3、4は官職をさすものと考えられる。3は「家主」と判読される。計3点出土した。家主は事務処理を執り行う下級役人である。4は「守」と判読される。欠損しており、上に字が続く可能性がある。5は「乙猪」。人名をさすものと考えられる。計7点出土した。6は「鞞手」。なお、内側に墨書されるものは全体の1割程度である。7～9は地名をさすものと考えられる。7は「刀山下」。これ以外に3点出土した。8は「長山」。9は「常石田」。計3点出土した。10は「字」。計2点出土した。墨書土器は他に「依」、「善」、「福奉」、「西祈」等の祭祀的内容を持つものもある。

11～14は銅製の帯金具で、池状遺構001及び流出部より出土した。共存遺物からいずれも8世紀代に位置づけられるものと考えられる。11、12は丸軀、13、14は巡方である。11は長辺3.9cm、短辺2.6cm、厚さ0.8cmを測る。鉾は3本で、側

面には塗布された漆が残存する。12は長辺2.3cm、短辺1.5cm、厚さ0.1cmを測る。鉾は3本である。13は裏金具も残存する。長辺2.3cm、短辺1.5cm、厚さ0.1cmを測る。鉾は4本で、裏金具の孔は2個である。14は長方形を呈する。長辺3.1cm、短辺1.5cm、厚さ0.6cmを測る。鉾は3本で、側面に塗布された漆が残存する。

15は銅製の権衡で、池状遺構SX001の流出部より出土した。共存遺物から8世紀代に位置づけられる。傘部は六角形を呈し、円形の台が付く。底部にえぐられた痕跡があり、重さを調整したもののか。高さ2.8cm、幅3.0～3.4cm、重さ97gを測る。権衡はこれ以外に石製のものも出土している。

16、17は木製の形代で、SX001から出土した。16は船形で、丸木の両端を削り、船首と船尾を表現する。中央は削りだして、屋形船風の側面観を呈する。船形は30点あまり確認しているが、大半がこのタイプのものである。出土層位から8世紀前半代に位置づけられる。このタイプのは大阪府住友銅吹所や徳島県観音寺遺跡等で類例が見られるが、7世紀代に位置づけられるものが多く、古い形態を持つものと考えられる。17は人形と考えられる。丸木を加工し、頭部と脚を表現する。板状の人形は出土していない。池状遺構からは多くの遺物が出土しているが、これらのような祭祀に関連する遺物が多数見られる。木製品では斎申、鳥形、陽物形、籬子(ササラゴ)等がある。また、丸木刀、鳴鐘、鉄鏝等も多数出土しており、これらも祭祀に関連するものと考えられる。

木簡について

木簡は総数37点が出土している。1は上・下端、側縁の一方が欠損している。「□帳」の「□」は計か。計帳作成に関わるものと考えられる。延暦四年(七八五)の年紀が記される。2は上・下端が欠損している。両面に記載があるが、一方は墨が消えて、文字痕が浮き出た状態であるが、判読できない。3は上・下端が欠損している。両面に「難波部」、「額田部」等の氏名が列記されている。4は下端が欠損している。「嶋部赤敷里」は「和名類聚抄」所載の筑前国志麻郡内の七郷のひとつ、

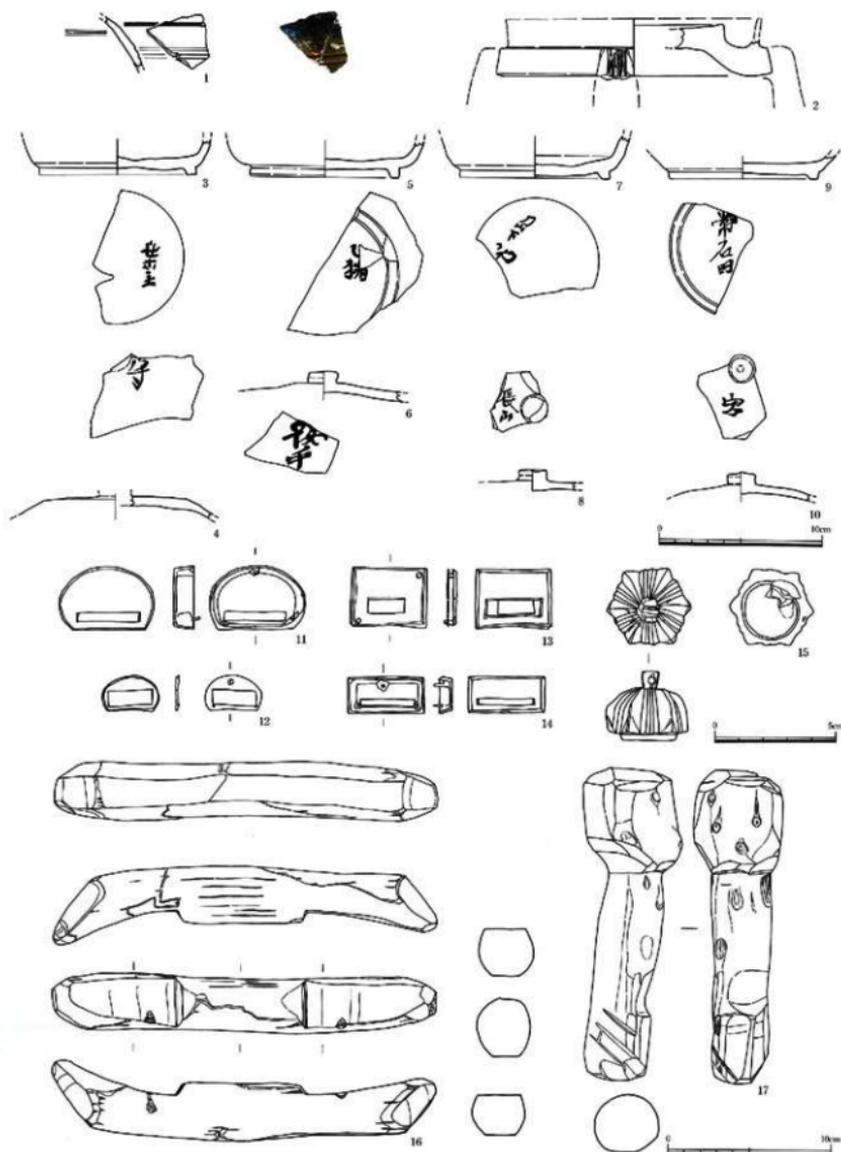


Fig.8 第20次調査出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

「明敷」をさすものと考えられる。5は上端を欠く。6は両端、中間、両側が欠損する。「為」の習書か。7は上端の一部を欠くが、ほぼ完形。「久米部口手」の人名が記される。8は上端の一部を欠くが、ほぼ完形の荷札木簡。表側は三行にわたる。一行目の「太寶元年辛丑」（七〇）の年紀は十支との併用で、大宝令施行直後の状況を示す資料と言えよう。二行目の「鮑廿四連代税」が木簡を付けた品物を示していると考えられる。三行目の「官川内口」は人名、「黒毛馬胸口」は運搬に使用した馬の特徴を示すものであろうか。裏側には「六人部口」の人名が記される。9は上端と側縁の一方を欠く。「山口〔奈々〕郷」の地名が記される。志麻郡内では比定地は見当たらない。10は上端を欠損、下端は切断されている。「建部根足」の人名が記される。11は上端を欠く。12は池状遺構の上層での出土であり、九世紀以降に下る可能性がある。ほぼ完形品の幅広い木簡で文字は三行にわたる。中央付近に穿孔が見られる。13は上端を欠く。紋に関わるものか。14は下端と側縁の一方を欠くが、九〇cmを超える長大な木簡である。片面は横方向に文字が書かれる。判読しづらいが、人偏の文字の習書と考えられる。もう一方も遺存状況は悪い。「出〔拳カ〕給」とあり、出拳に関わるものか。15は完形品。不明瞭ながら「難波部」の氏名が判読できる。16は上・下端が欠損する。「久米部」、「大〔神カ〕部」の氏名が連記される。17は完形品、18は下端と側縁の一方を欠く。いずれも墨痕が若干見られる程度である。20は上端が欠損、下端は切断している。「租官」は職名を示すものか。21は下端と側縁の一方を欠く。22は上・下端が欠損する。片方は二行あり、最初の行には「錢百五十文」、二行目には「西阿甲麻呂」の人名が判読できる。23は下端を欠く。墨は消えているが、文字痕が浮き出している。裏側には「三月六日」の日付が記される。24は上・下端が欠損する。25は上・下端が欠損する。26は二片に折損しているが、同一個体と考えられる。上端は丸く仕上げられる。上端近くに「献上」と記され、やや下ったところ

に文字が見られるが、判読できない。下方に「延暦四年十月十四日真成」と年紀と人名を記している。27は上・下端が欠損する。28は上端が欠損している。「四」の下にも墨痕がありそうであるが、不明。29は上・下端が欠損している。「中臣部刀良」の人名の上に「志」とある。30は上端を主頭状に削り、下端は尖らせる。文字はかすれてほとんど読めないが、「ア（部）」の字があり、人名か。31は上端が欠損している。「従人志麻」の人名が見られる。32は下端を欠く。「登志郷」は志麻郡内の郷名である。33～35は同一個体と考えられるが、接点がなく、別々の番号を付した。「郷明」、「明」等の文字から郡内の郷名の「明敷郷」を指すものと考えられる。36は上端を欠く。墨がかすかに残る。「寺」か。37は両端、両側を欠く。文字は2行あり、最初の行には「四百五」の数が記されている。

今回出土した木簡を概観すると、時間的には8世紀前半代と後半代の二つに分けられる。内容については年紀を記したもの（大宝元年、延暦四年）、地名（赤敷里（明敷郷）、登志郷など）、貢納に関わるもの（鮑廿四連、献上など）、税に関わるもの（出拳、計帳、税官、租官など）、祭祀に関わるもの（道塞など）、人名（難波部、額田部など）など、いずれも律令制下の地域支配に関わるものといえる。現状では製鉄に関わる木簡は確認されていない。

まとめ

遺跡の変遷を簡単にまとめると、この地点では古墳時代前期から集落が営まれ、古墳時代後期、7世紀頃まで継続している。溜池状遺構 SX044はその機能しており、溜水の利用や木器の貯蔵に使用されたと考えられる。その後、8世紀を前後する時期にそれ以前にあった集落域を平地して池状遺構 SX001、倉庫群等が造られる。これらの遺構から木簡や硯、帯金具などが出土しており、何らかの官衙施設が想定される。8世紀後半代には製鉄関連遺構が見られるが、大規模なものではない。この地点の倉庫群等の官衙施設は9世紀代には終焉を迎えるのではないかと考える。



Ph.22 第20次調査出土木簡赤外線写真

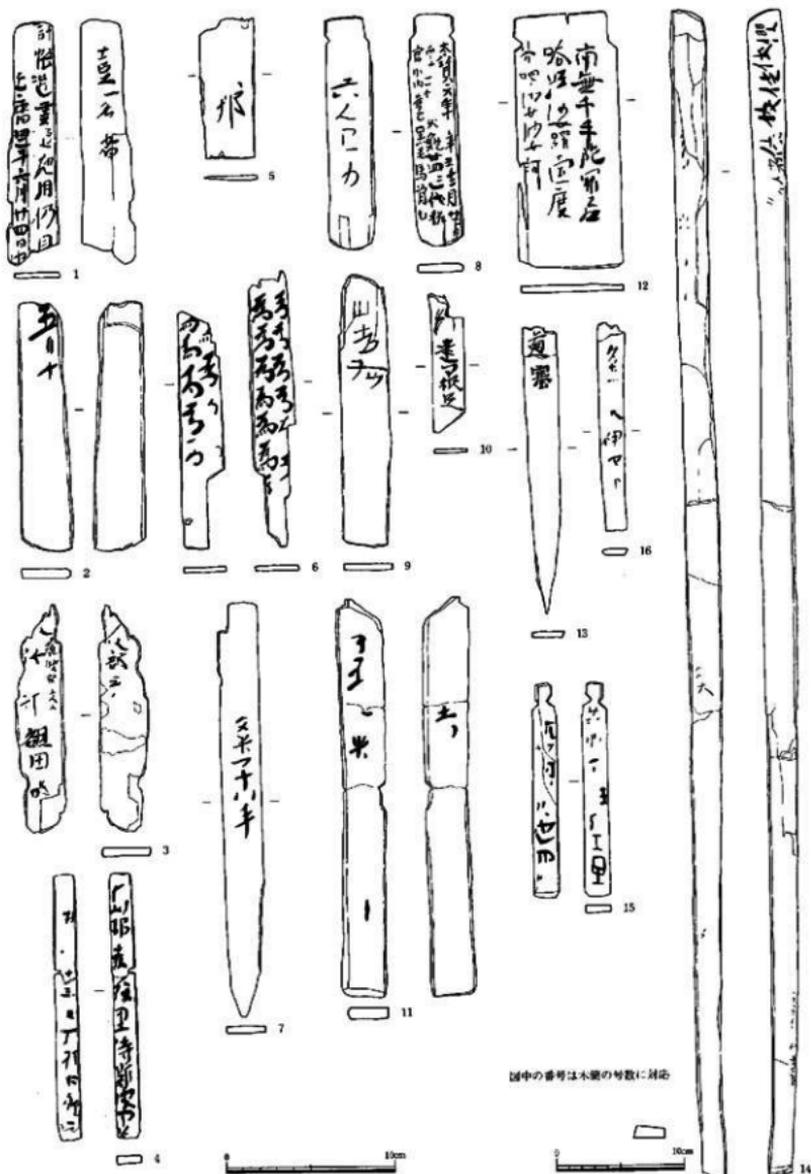


Fig.9 第20次調査出土木簡実測図1 (1/3, 1/4)

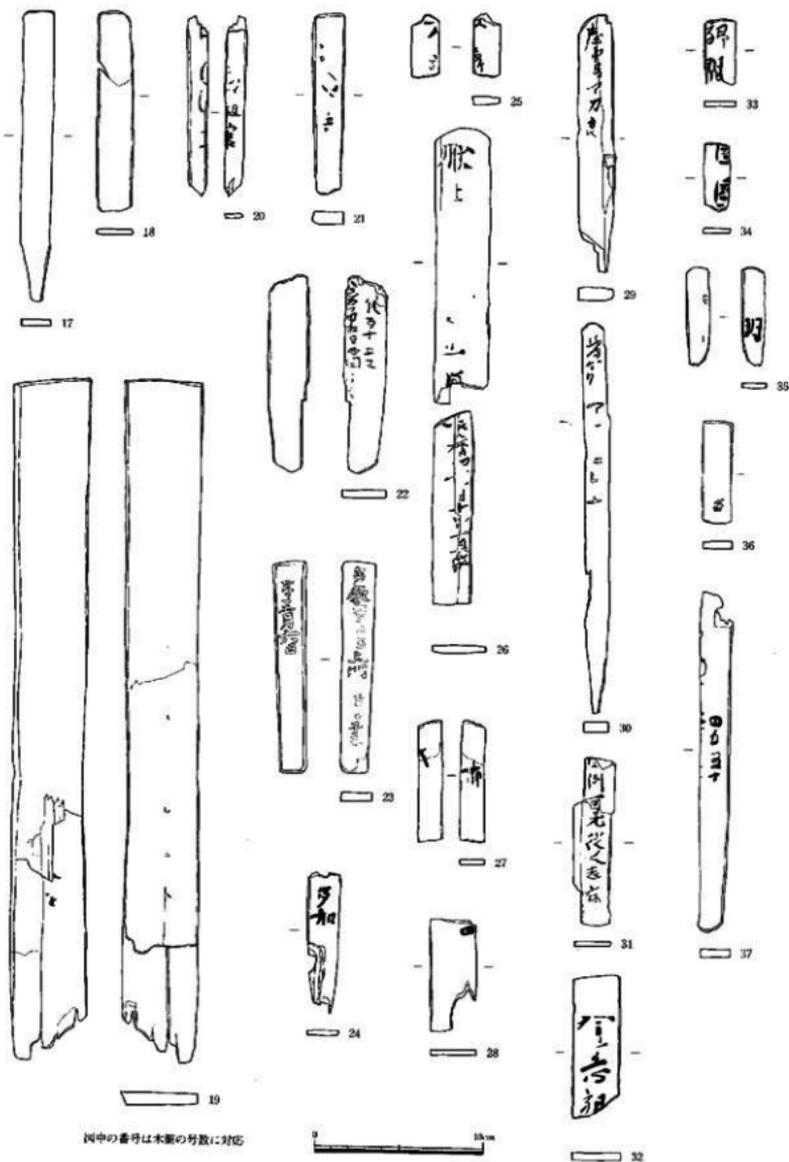


Fig.10 第20次調査出土木簡実測図2 (1/3)

19 [] (枚)

(110)×5×8 型式
D3 001 暗灰色砂質土

20 ・× [] 租官

(98)×(12)×3 081型式
D4 002(準)暗灰色砂質土

21 [] (ア)

(107)×(9)×8 019型式
C4 002(準)暗灰色砂質土

22 [] (鉄カ)

百十五文
西ア田麻呂西 []

(118)×(25)×5 081型式
D5 002 暗灰色砂質土

23 [] (家カ) [] (間カ)

127×(20)×6 081型式
D2 001 暗灰色砂質土

24 ○多加

(80)×19×3 051型式
D3 001 暗灰色砂質土

25 [] []

(80)×17×5 081型式
D4 002(準)暗灰色砂質土

26 [] (皮カ) [] (延暦四年十月十四日真成)

(156)×110×(20)×5 011型式
E1 001 暗灰色砂質土

27 [] []

(73)×(12)×8 051型式
D4 002(準)暗灰色砂質土

28 [] []

(82)×5×5 051型式
C1 001 暗灰色砂質土

29 [] 中佐マ刀良

(154)×21×8 081型式
D4 002(準)暗灰色砂質土

30 [] (堀野アカ)

(215)×15×5 051型式
C3 001 暗灰色砂質土

31 [] 例可充従人志麻

(67)×21×3 019型式
D3-4 001暗灰色砂質土

32 [] 登志郷

(83)×21×5 019型式
D3-4 001 暗灰色砂質土

33 [] 郷明

(88)×30×4 081型式
D7 002 暗灰色砂質土

34 [] []

(40)×(16)×5 081型式
D7 002 暗灰色砂質土

35 [] 明

(88)×(13)×3 081型式
D7 002 暗灰色砂質土

36 [] (寄カ)

(80)×26×5 081型式
D4 001 暗灰色砂質土

37 [] [] 四百五十

(205)×(18)×5 081型式
D5 001 暗灰色砂質土

木簡の釈文に加えた符号は木簡研究の凡例に従った。釈文に付した番号は遺物番号に対応する。遺構番号の001は池状遺構、002は流出部にあたる。法量は長さ、巾、厚さで、単位はmmである。

なお、木簡の釈文にあたって、狩野久氏、坂上康徳氏、佐藤信氏、柴田博子氏、田中正日子氏、籠野和己氏、東野治之氏、永山修一氏、馬場基氏、森公章氏、八木充氏、吉川聡氏、吉川真司氏、渡辺晃宏氏をはじめとした多くの方々に資料を見て頂き、検討していただいた。今回掲載した釈文はそれらの成果を基に、坂上康徳氏に監修していただいた。また、西海道官衙研究会、木簡学会等の研究会の場でも貴重なご教示頂いた。記して謝意を表したい。

第21次調査

調査地点は石ヶ元古墳群の内、1～3号墳にかけての丘陵と、その南側の谷部にかけてである。丘陵部の石ヶ元1～3号墳は1996年度に確認調査が行われ、1、3号墳の石室内はこの時点で調査されている。このほか今回の調査では、土壙墓2基、小石室墳1基、焼土層などを検出した。南側の調査区ではピット、溝、焼土層、近世の畑の跡などが検出されたほかは目立った遺構がない。出土遺物には青磁、土師器、滑石製石鏡片などがある。

古墳群は、福岡城築城時の石材の抜き取りと、戦後の果樹園の造成で大きく破壊されており、遺存状況は良好でない。1号墳石室は左側壁が遺存し、玄室長198cmを測る横穴式石室である。1996年の調査では、鉄地金銅張花形杏葉が1点出土している。2号墳は推定墳径22mを測る群内最大規模の円墳で、玄室長315cmを測る大型の横穴式石室を有する。玄室床面では奥壁に沿って仕切石を並べた区画が検出された。これは12号墳や19号墳などでも検出されている。また墓道の土層観察から、初葬を含めて少なくとも4回の埋葬があったものと考えられる。須恵器・土師器の他、鉄器、装身具類、鉄滓が出土した。3号墳は玄室長210cmを測る横穴式石室を有し、平面形は正方形に近い。群内で玄武岩で構築されている唯一の例である。

小石室SR-018は73cm×65cmの長方形プランで床面礫敷である。出土遺物は皆無である。また、2基の土壙墓からは須恵器や刀子が出土した。

古墳群の年代は、出土した須恵器や石室の構造から6世紀後半代、また土壙墓は7世紀代の所産と考えられる。本古墳群では鉄滓を供献する古墳や製鉄関連の遺物が多く、今回の2号墳でも鉄滓が出土し、製鉄との深いつながりが窺える。これらの古墳や近隣の製鉄遺跡との関連の究明が今後の大きな課題となろう。



Ph.23 1～3号墳全景(東から)



Ph.24 2号墳石室全景(西から)

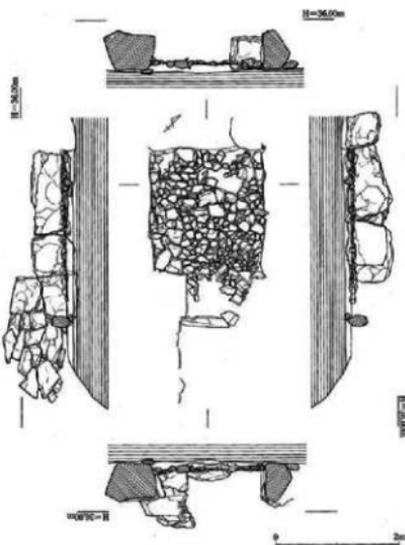


Fig.11 3号墳石室実測図(1/80)

第22次調査

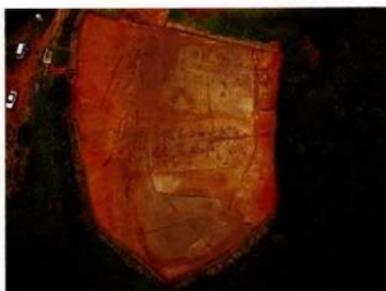
調査地点は事業地全体の東部、金屎池の東側に位置する。東側に開析する浅い谷部の中ほどに占地している。調査地点の北東には大型円墳の経塚古墳、南東には前方後円墳の堀除古墳があり、近くには飛櫛貝塚などもあり移転地内では遺跡が密集する地域にあたる。

今回検出した遺構は製鉄遺構1基、掘立柱建物7棟、井戸2基、溝状遺構10数条である。遺構が比較的残っていたのは池の築堤の下で、その西側は溜池築造、東側は水田化されたときの削平を受け遺構の遺存は悪い。

製鉄遺構は調査区の南端に位置し、南側の水崎から伸びる丘陵の先端の裾部に位置する。後世水田化により段造成され、炉本体は全て破壊されていた。炉壁、鉄滓が腐棄されている腐滓土坑が確認され、その東側が溝状に窪み、一部が被熱し赤変し



Fig.12 第22次調査全体図 (1/400)



Ph.25 調査区西半部全景 (西から)

ている。炉の構造、規模については不明だが、全長4.5m、最大幅3.25m、深さ0.9mの不整形土坑が確認でき、本来は鉄アレイ形の製鉄炉が推定される。他に製鉄関連遺構として鍛冶滓で埋まったピットがある。径60cm弱のほぼ円形の平面形である。ピットの上層に輪の羽口とともに鍛冶滓が一括して投棄された状況を示している。近くに鍛冶遺構があったものと考えられる。

掘立柱建物は総柱建物が4棟、側柱建物が3棟ある。現状では西側に側柱建物、北側に総柱建物を取り付き、直角に曲がる「L」字状の建物配置になっている。南端の東西に伸びる溝もほぼ同時期と考えられ、あるいは「コ」の字になる可能性もある。西半分は溜池の築造時に削平され、東側も遺存状態が悪いので全体を窺い知ることが出来ない。建物の規模は北側に2間×2間の総柱建物の倉庫が3棟、建物の柱穴はいずれも円形で径30～40cmと小さい。西側に2間×4間の側柱建物がある。柱穴には重複しているもの有り、最低、二時期の差が認められる。建物の方向はほぼ同一で、一定の企画性が確認できた。建物から東へ寄った地点に井戸がある。掘り方の規模は小さく、平面円形で径1.3m前後、深さ1.1mの断面不整形を呈する素掘の井戸である。1号井戸の床面は平坦であるが、壁面下部は湧水の為か抉れている。

これらの遺構の年代は出土遺物から大きな時間的な差はあまりないものと考えられ7～8世紀の小さな集落である。

第23次調査

福岡市土地開発公社より平成12年5月30日付で製鉄遺構の確認調査と第1工区の試掘調査の依頼を受け平成12年6月10日より調査を開始した。製鉄遺構確認調査の対象地で、志摩町に属する2ヶ所に関しては志摩町教育委員会に依頼し、福岡市域の6ヶ所を対象とした。2ヶ所（第21・24次調査）については本格調査を実施することとし、他の4ヶ所の確認調査を行った。九州大学が再取得された地区にも試掘調査で2ヶ所報告されているが、この地点は平成14年度後半期に確認調査を行う予定である。このほかに第1工区における試掘調査を実施した。

D-8地点(D-8-1・2)確認調査

調査面積：D-8-1地点1,323㎡

：D-8-2地点1,422㎡

調査期間：平成12年6月10日～同8月10日
試掘調査によると炭化物等が多量に検出されるとのことであったが、対象地の約半分を確認した結果、遺構は検出されなかった。出土遺物は全く検出されず、炭化物のみが出土した。

C-2地点確認調査

調査面積：C-2地点1,161㎡

調査期間：平成12年9月1日～同10月7日
緑地保全地区であるため、最小限の調査にとどめた。検出された遺構は谷部となる西側斜面に伏焼土壌が2基検出されたが、遺物が出土しなかったため時期は不明。

E-2地点確認調査

調査面積：E-2地点5,200㎡

調査期間：平成12年10月10日～13年3月27日
試掘調査で確認されている土壌を再確認するとともに谷部の5,200㎡を調査した。検出された遺構は中型の伏焼土壌4基、小型の伏焼土壌4基、計8基と柱穴群を検出したが、柱穴群はまともらず建物にはならなかった。遺物は出土しなかったため時期は不明。

試掘・立会調査

第1工区の未試掘部分について調査を実施し

た。尾根部については主に立会、谷部については重機による掘削により試掘調査を実施した。

試掘調査対象地：福岡市西区大字桑原・元岡地区

調査期間：平成12年8月11日～13年1月29日

調査面積：試掘調査918㎡

調査箇所：第1工区未試掘部分7ヶ所（35トレンチ）

調査の結果、すべての地点で、製鉄遺構及び遺構、遺物を確認することはできなかった。



Ph.26 D-8-1地点(東から)



Ph.27 D-8-2地点 (東から)



Ph.28 C-2地点全景 (北から)



Ph.29 E-2-1地点全景 (北東から)



Ph.30 E-2-1地点伏焼土壌 (北西から)



Fig.13 第23次調査(確認)と試掘調査地点 (1/10,000)

第24次調査

調査地点は大字桑原字金屎にあり、大学移転事業地内では東側のB地区に含まれる。地形的には水崎山から北に向かう小支谷の東斜面にあたり、北側は金屎池に接する。この斜面は東から西側に浅く開析した谷頭となっており、調査区内での東西の比高差は約19mをはかる。

この地点では調査以前から鉄滓が採集されており、平成7年度の踏査でも古墳時代の須恵器とともに多量の鉄滓を確認しており、大規模な製鉄遺構の存在が予想されていた。調査は対象地全面を覆っていた樹木の伐採後、平成12年8月20日から開始し、平成13年6月30日でいったん中断し、平成14年5月9日から再開した。調査はなお続行中であり、ここでは平成14年12月までの調査概要を報告する。これまでに検出した遺構は、奈良時代の製鉄関係遺構と古墳時代後期の集落にほぼ限定されており、ほかには縄文・弥生時代の遺物が散見するにとどまる。調査面積約5,500㎡。

製鉄関連遺構 表土剥ぎによって、斜面の中腹部(F-4・5～H-4・5区)と裾部(C・D-6・7区)の二ヶ所に鉄滓が集中して堆積していることが分かり、精査の結果それぞれ製鉄に関係した遺構を検出した。

中腹部では調査区北側に沿って北東-南西方向の製錬炉を、斜面下方から4号炉、5号炉、3号炉と3基並列した状況で検出した。いずれも箱形炉で、それぞれの炉の両側には廃滓土坑が連結する。さらに炉の外側四方には輪座とみられる小土坑が設けられている。このうち3号炉は炉底塊(幅25×35cm、高さ15cm前後)まで残存しており、炉の下部構造をとらえる重要な手がかりとなった。またこの西側廃滓土坑には炉からの流出滓がそのまま残っていた。この3号炉は5号炉を埋めて整地した後に築いており、4号炉と5号炉の先後関係は削平で明確さを欠くが、おそらく斜面下方の4号炉から上方の3号炉へと順次築いていったものと考えられる。3号炉の北には鍛冶炉があり、同時操業の可能性もある。この3基の製

錬炉の廃滓は南西側の谷底に広がるが、これを取り囲む南側から西側にかけての斜面で鍛冶炉1基、砂鉄を溜めたビット2基、炭灰と考えられる焼土坑など7基を検出した。

裾部は、現在調査を進めている地区である。ここでは鉄滓と炉壁が約12m四方に小山のように堆積していた。この堆積の最も高い南東部分で南北方向の製錬炉1基(12号炉)とそれに切られた東西方向の2基の製錬炉(13、14号炉)を検出した。12号炉が裾部では最も新しく、13・14号炉廃棄の後整地された面に築造されていること、また12号炉の廃滓の一部が南側に行われていることなどが判明している。この廃滓の下には8号製錬炉があることから、未掘の部分にさらに炉がある可能性もある。この地区ではほかに鍛冶炉1基、廃滓土坑なども検出している。

この二ヶ所以外では焼土坑が調査区内に点在している。これら製鉄関係遺構は、踏査の段階では古墳時代のものとも考えられていたが、遺構そのものから出土する遺物はほぼ奈良時代に属することが明らかになった。さらに細かい時期比定、また中腹部と裾部の製鉄関係遺構の先後関係などは、今後の調査と整理に期したい。

集落関連遺構 D-3・4区で竪穴住居7基(SC3～9)、E・F-4・5区で竪穴住居2基(SC1・2)、またG・H-4区では下層から竪穴住居1基(SC10)と掘立柱建物1棟(SB1)などを検出した。竪穴住居はいずれも平面隅丸長方形を呈し、このうちSC10は長さ4.7m、幅3.8m、4本柱で、南壁中央に竈を設ける。SB1は2×2間で、南側に庇がつく。これらの遺構は谷をほぼ東西方向に何段も造成したテラス上に造られており、SC1～9はそのテラスの先端が崩壊しているため、東側部分しか残っていなかった。竪穴住居からの出土遺物は、土師器、須恵器などで、その時期は6世紀末前後に比定できる。ほかに滑石製白玉がまとまって出土している。

なお、全体図にはG・I-4・5区の下層(古墳時代)の遺構は示していない。また、上に使用した遺構番号は暫定的なものである。

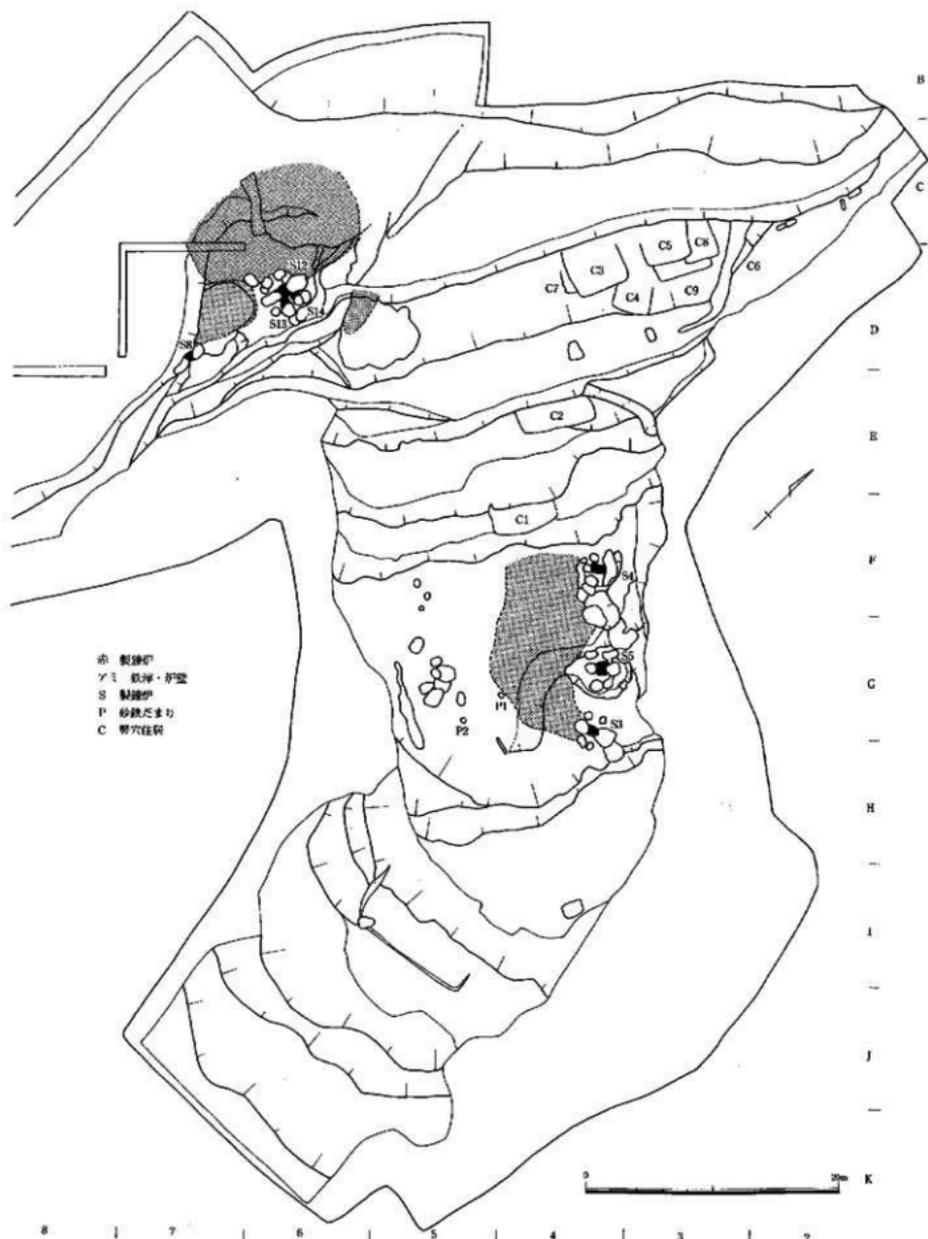


Fig.14 第24次調査全体図 (1/400)



Ph.31 調査地点全景（上空から、2002年9月）



Ph.32 調査区全景（西から）



Ph.33 3号製錬炉（西から）



Ph.34 12号製錬炉と裾部の鉄滓堆積（北から）



Ph.35 D-3-4区竪穴住居群（北東から）



Ph.36 G-H-4区下層SC10とSB1（南から）

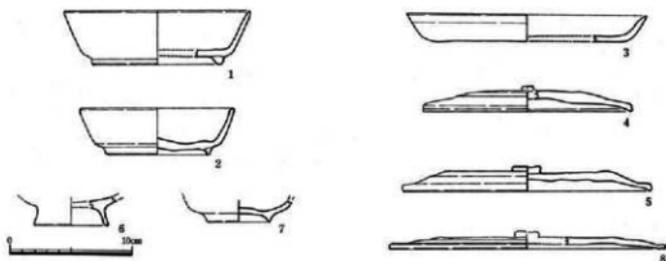


Fig.15 出土土器実測図（1/4）（1. 中腹部鉄滓層 2-5, 4号炉 6-8, G-4区）
（1-5-8. 須恵器 6. 内黒土器 7. 土師器）

第 25 次調査

第 25 次調査では桑原古墳群 A 群の 2 号墳から 8 号墳、計 7 基の調査をおこなった。古墳群は水崎山から北西に向かって派生する尾根上に立地する。最も標高の高い 70m 付近には前方後円墳である元岡石ヶ原古墳が位置する。尾根はこの前方後円墳で西方向と南東方向に分岐し、桑原古墳群 A 群は西に分岐した尾根上に造営される。古墳の立地する標高は 36 ~ 72m を測り、現況は山林である。最も標高の低い尾根の先端部、標高 38m 付近に 2 号墳、東側に隣接して 3 号墳が位置する。尾根は南西方向に延び、標高 48m 付近に 4 号墳、標高 57m 付近に 5 号墳が位置し、この地点で尾根は東側へと曲がる。30m 程東側に 6 号墳（標高 58m）そこから急激に斜面は上り、標高 68m 付近に 7 号墳が立地する。その後尾根は北東に折れ、標高 72m 付近に 8 号墳が位置したと思われる。8 号墳から 50m 程東側にいくと元岡石ヶ原古墳に至る。このように尾根は小さな谷が幾重にも入り込み、複雑な形状を展開する。また、後世

の削平のために尾根は非常に瘦せている。古墳の遺存状況は悪く、完存している石室はなく、墳丘も大半が流失する。

2 号墳 墳径約 9m を測る円墳で、北側から東側にかけて周溝をもつ。墳丘は大半が流失し、地山整形面が残る。石室は長さ 210cm、幅 140cm の竪穴系横口式石室で南西方向に向かって開口する。石室は腰石のみの遺存で、短い墓道が付設する。小振りの花崗岩の割石に少量の結晶片岩の割石を小口積みする。床面は 2 面確認でき、どちらも敷石が残る。2 面目からは鍛冶工具の金鉋、金槌、刀子、ガラス小玉が出土する。墓道からは須恵器の坏身、坏蓋がまとめて出土するが、時期は 7 世紀のもので、初葬時のものではなく、追葬時のものと考えられる。

3 号墳 南西側が大きく削平され、崖面となる。墳径 13m を測る円墳で、東側に周溝をもつ。墳丘はわずかに遺存する。石室は長さ 270cm、幅 190cm の竪穴系横口式石室で、南西方向に向かって開口する。奥壁には高さ 160cm の巨大な 1 枚石を抱える。石室は 2 号墳よりひとまわり大き

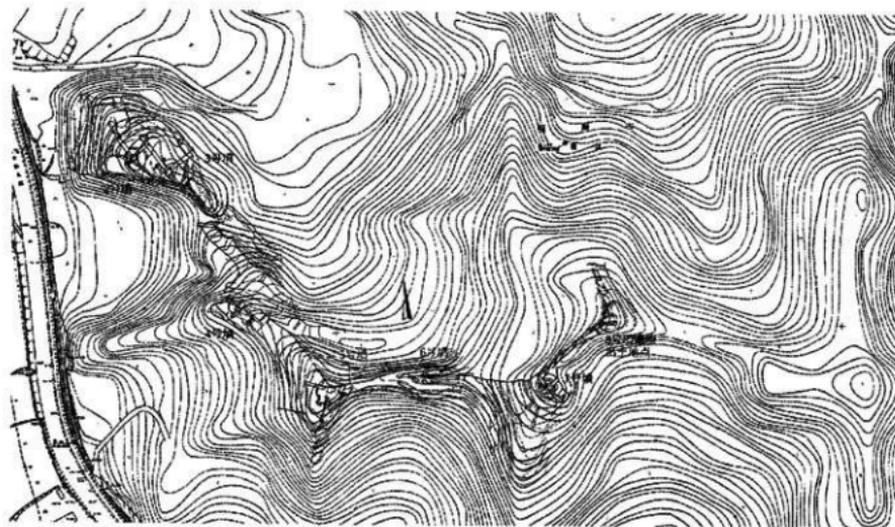


Fig.16 桑原古墳群 A 群分布図 (1/1,000)

く、石材も大きなものを用いる。床面は1面で、拳大の花崗岩小礫を敷く。攪乱を受けていたが、石室床面からは鉄鏃、耳環、琥珀玉、ガラス小玉が出土する。周溝からは6世紀後半の須恵器甕が散乱した状態で出土する。閉塞石は結晶片岩が1石立った状態で検出している。

4号墳 北東側から南西側にかけて大きく削平される。墳径約11mを測る円墳で、東側に周溝をもつ。墳丘は南東側にわずかに遺存し、黄褐色土、白色土での細かい盛土が確認できる。石室は長さ250cm、幅160cmを測り、両袖式の横穴式石室で南西方向に開口する。石室は花崗岩と結晶片岩を用い小口積みを行う。床面は攪乱を受けほとんど残っていないが、鉄鏃、滑石製白玉、7世紀の須恵器、土師器が散乱した状態で出土する。石室掘方は1.4mと深く、黄橙色粘質土、褐色シルトで細かく版築し、充填する。閉塞は3回行われ、最も新しい段階では鉄滓が1点閉塞石と混在して出土する。初葬時では厚さ10cm程の板石を仕切石より玄室側に立て、その前に人頭大の石を

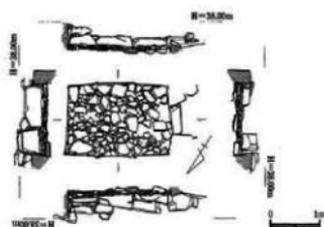


Fig.17 2号墳石室実測図 (1/100)



Ph.37 2号墳遺物出土状況 (南西から)



Ph.38 桑原古墳群A群墳丘遺存状況 (南から)

積んだ状況が窺える。

5号墳 削平が著しく、墳丘が全く遺存せず、地山整形のわずかな段が確認できるのみである。円墳と思われ、推定墳径は10m前後である。石室は東側に向かって開口する。部分的に腰石が残り、石の抜き跡や掘方から一辺2mの正方形プランの石室に復元できる。袖石は横位に置かれる。床面は拳大の花崗岩を用いて造り、3/4程遺存する。敷石上からは北西隅に刀子、碧玉製管玉、碧玉製切子玉、南東隅に須恵器、土師器がまとめて出土する。須恵器には5世紀に遡るものも存在する。

6号墳 墳丘、石室ともに北側と南側を大きく削平され、石室は露出した状況であった。推定墳径10mを測る円墳で、東側と西側に周溝が巡る。長さ180cm以上、幅150cmを測る両袖式単室の横穴式石室で、南側に開口する。床面には敷石が貼られ、遺物は出土しない。西側周溝からは6世紀後半の須恵器の杯身が出土する。羨道部は幅約1m、長さ1mを測り、西側にやや振っている。

7号墳 墳丘、石室ともに遺存状況は悪い。推定墳径は7～8mと考えられる円墳である。北側では周溝状の窪みを確認した。墳丘流土中からは5世紀後半の須恵器の杯身、杯蓋のセットが出土する。石室は袖石、仕切石、墓道部分の腰石のみ遺存する。袖石には幅35cm、長さ約1mの細長い石を立てて使用する。石の抜き跡や掘方から長さ240cm、幅80～90cmの細長い長方形プランの石室と考えられ、南西に向かって開口する。石



Ph.40 4号墳附墓石 (南西から)

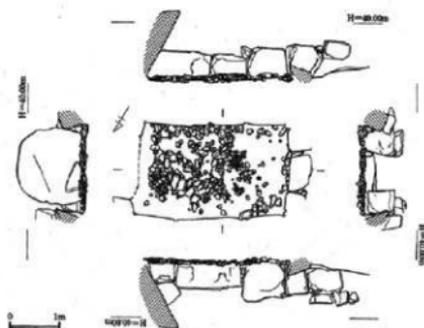


Fig.18 3号墳石室実測図 (1/100)



Ph.39 3号墳石室全景 (南西から)

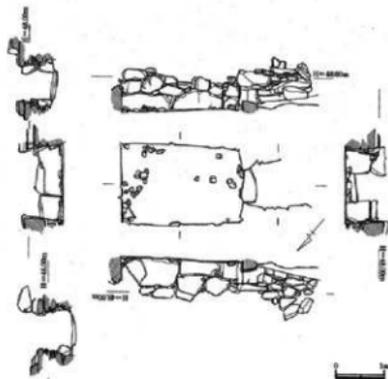


Fig.19 4号墳石室実測図 (1/100)

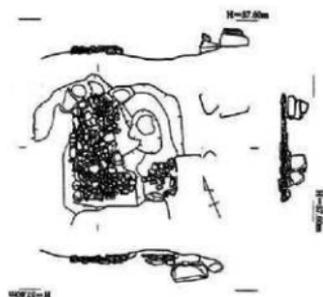


Fig.20 5号墳石室実測図 (1/100)

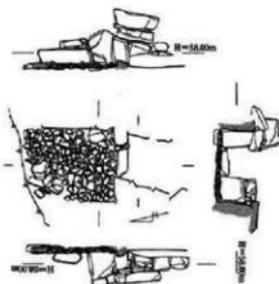


Fig.21 6号墳石室実測図 (1/100)

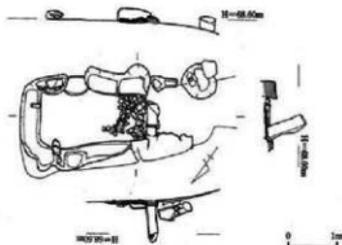
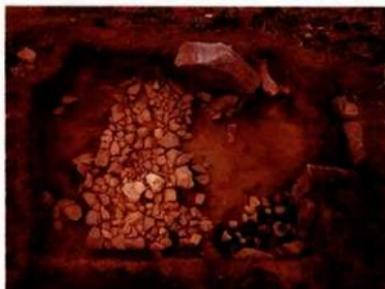


Fig.22 7号墳石室実測図 (1/100)

室からは鉄鏝が1点出土する。

8号墳 墳丘、石室は残っていない。細い瘦せ尾根の表土直下から6世紀の須恵器、滑石製紡錘車がまとまって出土した。これらの遺物は墳丘の造成面に置かれたものと考えられる。

古墳の遺存状況は悪く、墳丘も残っていないものが大半であった。遺物は6世紀から7世紀代の



Ph.41 5号墳遺物出土状況 (南西から)



Ph.42 8号墳遺物出土状況 (南東から)



Ph.43 7号墳石室全景 (南西から)

ものが多く、追葬時のものと考えられる。出土遺物や石室プラン等から時期変遷は、石室が長方形プランの7号墳が最も古く、方形プランの5号墳へと続く。竪穴系横口式石室をもつ2号墳・3号墳と横穴式石室をもつ4号墳・6号墳はそれに後続すると思われる。立地的には高所から古墳を造営している。

第26次調査

調査地点は事業地の東側、第20次調査の西側、戸山城の南側斜面に位置する。調査地は東西に延びる斜面(2,045m²) I区と南北の谷部(3,442m²) II区を調査対象とした。東西に延びる斜面には遺構の検出は認められなかった。南北の谷部には、奈良時代～弥生時代の遺構がほぼ全面に検出され、試掘トレンチの結果、約三面の遺構が重なっていることが判明した。第20次調査の奈良時代遺構と同時期の遺構を検出する目的で調査を行った。その結果、第一面の奈良時代の遺構は、掘立柱建物が11棟、伏焼土壇2基、溝状遺構が1条、古墳時代中期の竪穴式住居址が2軒検出された。段造成を3面持ち、石組遺構、破壊された横穴石室の古墳1基を検出した。

掘立柱建物

幅約35m、奥行約70mの中に掘立柱建物11棟が検出された。1×1間が5棟、1×2間が3棟、2×2間が1棟、2×3間が2棟である。柱穴自体は50～80cmであるが、柱痕は20～30cm程度で大型のものはない。

伏焼土壇

北西の奥部に1基検出した。壁面は全面が赤褐色で、堅く焼けている。大きさは長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.3m。周辺部にも焼けた痕跡がある土壇が見られ、炭焼き窯状の遺構と考えられる。覆土から須恵器の破片が出土している。東側端にも1基検出した。壁面はあまり焼けていない。大きさは長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.5m。

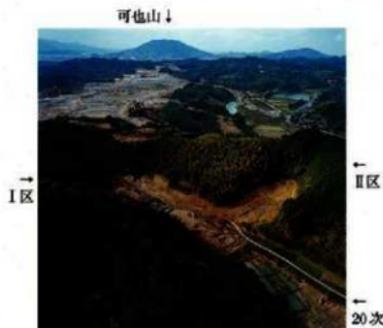
石組状遺構

第1段目の段造成部分に幅5m、高さ0.7mで石組を行っている。他の部分は約50～80cmの段差があるが、緩やかな段造成であるのに対して石組部分はほぼ垂直である。石組部分から奈良時代の須恵器が出土していることから、掘立柱建物と同時期の遺構と考えられる。

古墳時代竪穴式住居址

東側端の岩盤を削り竪穴式住居址3軒が検出した。2軒は切り合い関係が認められる。1軒の大

きさは、約3.2mの方形と約3.5mの方形で、時間的には非常に近い時期であることが、出土遺物から窺える。



Ph.44 第26次調査空撮(北東から)



Ph.45 第26次II区調査全景(東から)



Ph.46 第26次調査全景（東から）



Ph.47 II区東側（東から）



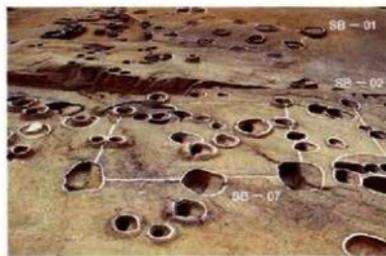
Ph.48 II区古墳時代型穴式住居址（北から）



Ph.49 II区石組遺構全景（南西から）



Ph.50 1号墳全景（南西から）



Ph.51 II区掘立柱建物（北から）



Ph.52 II区掘立柱建物（北から）



Ph.53 II区掘立柱建物（北から）

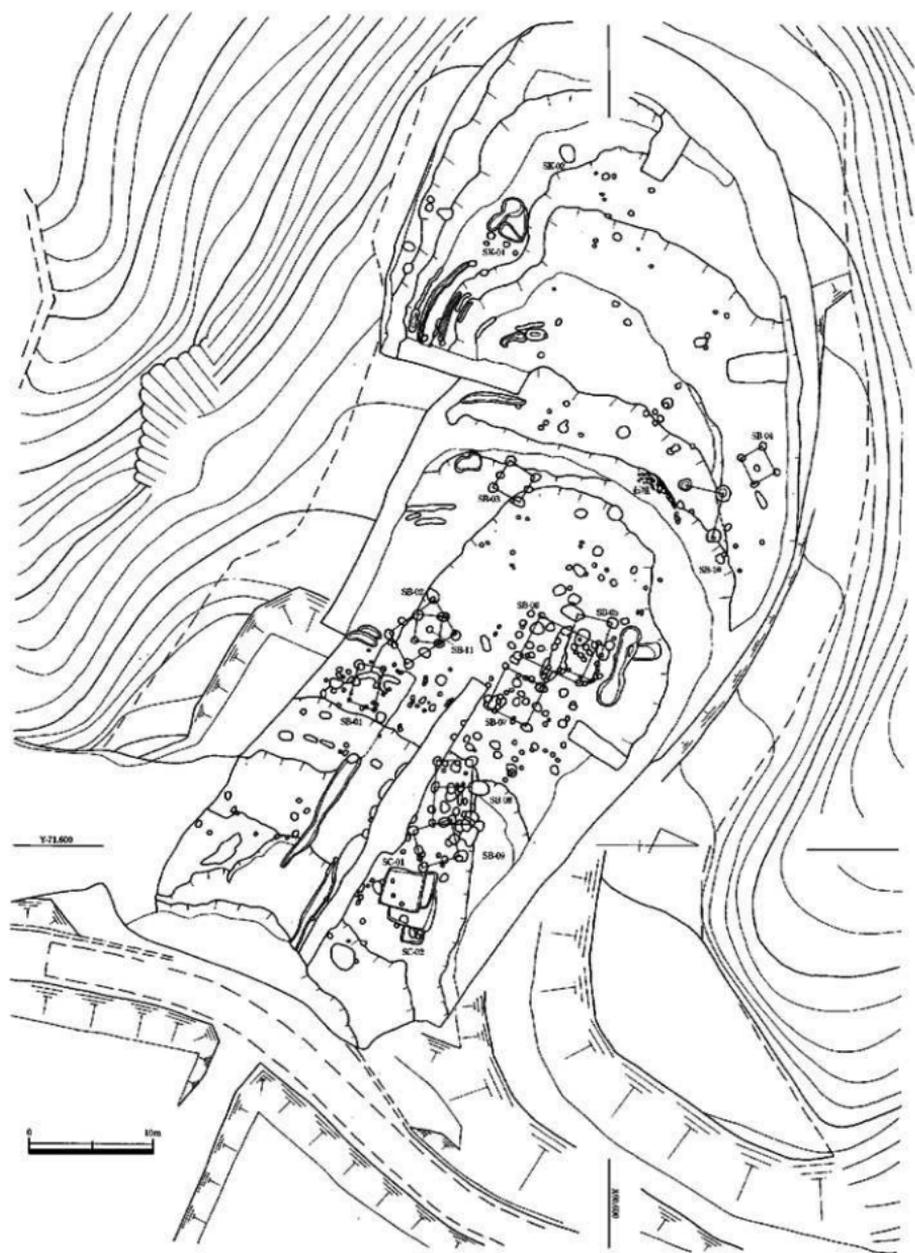


Fig.23 第26次Ⅱ区調査全体図 (1/400)

第27次調査

調査地点は、第20次調査の東側、金原前方後円墳から派生した東側に延びる台地の北側斜面に位置する。調査地は東西に延びる三段目の斜面の北側傾斜部分に遺構が認められるが、住居部分の遺存状態からその北側部分も削平を受けており、遺構の遺存状態は決して良い方ではない。検出された遺構は奈良時代の鍛冶炉4基・伏焼土壌1基と古墳時代竪穴式住居址が25軒、溝状遺構が5条、土壌13基である。

古墳時代竪穴式住居址群

全体で25基の竪穴式住居址が検出された。全体的に南側壁部分は非常に残りが良いが、北側部分は著しく削平を受けている。SC-01の場合でも南側壁の深さが0.9mと深い、北側では、0.2mと著しく削平を受けている。また、SC-16は火災によって家を放棄した状態で検出された。柱と共に焼けた粘土が多量に検出され、その状態から屋根の上に粘土を貼り付けたと思われる形跡が観察できるが、これは分析をまって判断したい。竪穴式住居址は4本柱で基本的には北側に炉を持つ。時期的には切り合い関係もあるが、古墳時代中期に属するものである。

溝状遺構

台地の傾斜に沿って3条の溝状遺構が検出されたが、出土遺物から現代の溝であることが判明した。新しく住居址を切り込むように4条、住居址と同時期のものが1条検出された。4条は古墳時代後半の遺物が出土している。溝もその殆どが削平されて検出されている。

奈良時代の鍛冶炉

4基の鍛冶炉が検出された。このほかにも4ヶ所で鉄滓が集中して検出された。鍛冶炉は小型で、径が30cm前後のものが殆どである。時期的には鉄滓と共伴して須恵器が出土していることから奈良時代と考えられる。

伏焼土壌

SC-01の西側から1基検出した。遺存状態が悪く、大きさも小さい。出土遺物はないため、時期

を決定できないが、おそらく奈良時代のものであろう。

土壌

土壌は13基検出されたが、すべて古墳時代の土器が出土している。

Pit群

Pitは多数検出したが、大きさ、深さが不揃いで、現場での掘立柱建物の発見には至らなかった。



Ph.54 第27次調査空撮(東から)



Ph.55 第27次調査空撮(東から)



Ph.56 第27次調査空撮(西北から)



Fig.24 第 27 次調査全体図 (1/400)



Ph.57 竪穴式住居跡全景 SC06～14 (西から)



Ph.58 SC01、02 全景 (北から)



Ph.59 SC16 全景 (北から)



Ph.60 SC16 完掘状況 (北から)

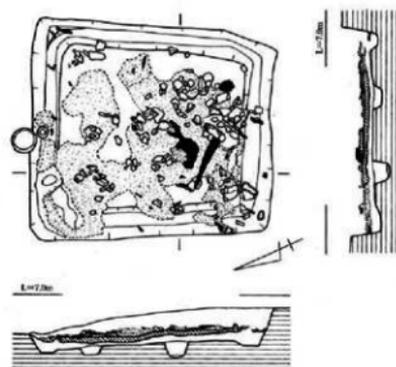


Fig.25 SC16 焼土、炭化物出土状況実測図 (1/80)

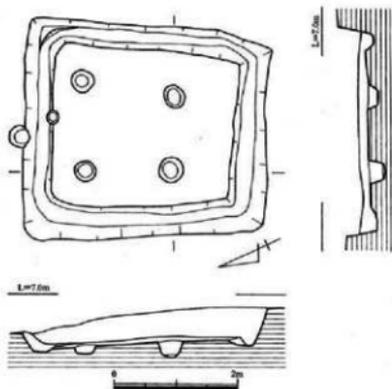


Fig.26 SC16 実測図 (1/80)

第28次調査

調査区は元岡瓜尾貝塚が存在する大阪池南西側丘陵部の南東側に傾斜する斜面上に位置する。A・B区は谷部、C区は大阪池に傾斜する斜面上に位置する。丘陵東南側は現在水田が広がっているが近世までは今津湾が深く入り込んでいたと思われ、遺構が存在する旧石器時代から中世にかけては今津湾に面していたものと考えられる。

A区西側の高まりは試掘の結果古墳ではなく丘陵の削り残しである。A区では中央を南東方向に走る幅12mの谷の兩岸で焼土坑3基と柱穴、溝等を確認した。自然流路からは弥生時代から中世までの遺物が約30箱出土した。流路の上層から瓦器椀と一緒に鉄滓が下層からは弥生土器・須恵器等が多く出土しているが弥生土器はB区からの流れ込み、須恵器は北側丘陵上古墳群からの落ち込みである。古代末から中世の段階でわずかに窪んでいた流路際に珪を築いて鉄滓を廃棄している。また流路南側斜面上部の縄文後期包含層からは径7cm前後の黒曜石が10点出土した。また、流路北側の斜面では底面から約1mの高さの位置にある幅2mのテラス状平場の礫面直上から細石刃が2点出土した。B区では遺物包含層の下で区画溝と土坑、柱穴等を確認した。包含層からの出土遺物は弥生時代から中世までを含む。盛土部分で保存されるので遺構の掘下げはしていない。C区で検出された貝塚も設計変更の結果保存されることとなり調査は行っていない。



Ph.61 第28次A区全景(東から)

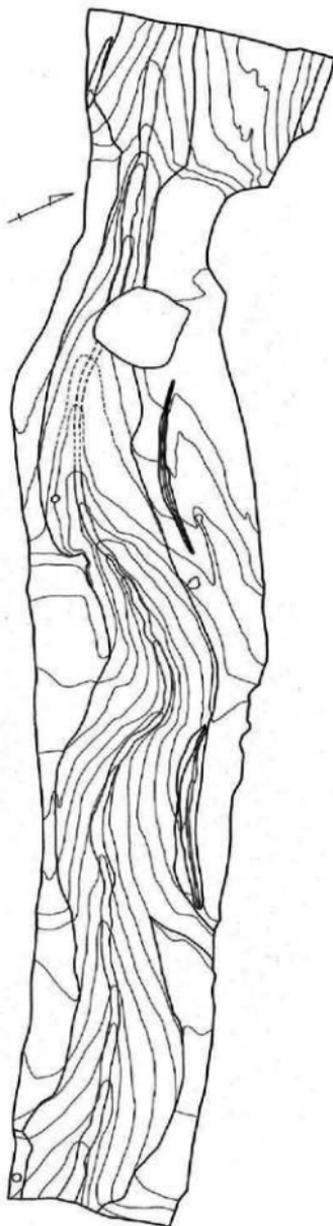


Fig.27 第28次A区全体図(1/400)

第29次調査

第29次調査では元岡古墳群N群の調査を行っている。調査は現在も継続中である。古墳群は水崎山から北西に向かって派生する尾根上に立地する。この尾根上には6世紀中葉に築造された前方後円墳である元岡石ヶ原古墳が立地する。N群は水崎山と元岡石ヶ原古墳との間の尾根上に立地する古墳群である。

試掘と踏査の結果、現在のところ9基の円墳を確認している。みかん畑の造成等により、尾根は削られ、斜面には土が盛られ、段造成を行っている。段造成の斜面部分には古墳に使用されていたと思われる石材を用いて、石垣を築いている。そのため、古墳の遺存状況は非常に悪く、盛土は流失し、石室は半壊状態である。現況の斜面では須恵器、土師器や鉄鎌等の鉄製品も採集できる。石室は確認できないが、石材や遺物がまとまって出土する箇所も見られ、全壊している古墳もあると考えられる。

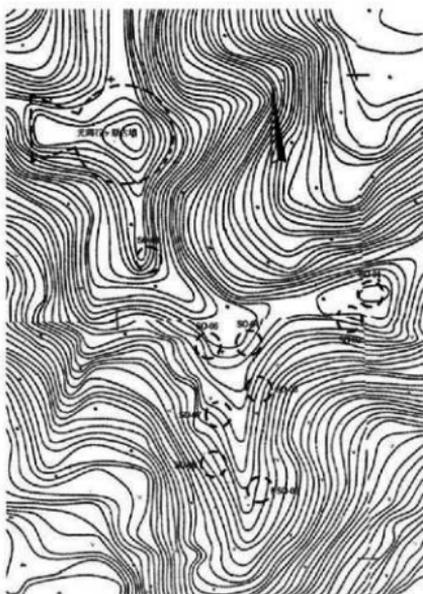
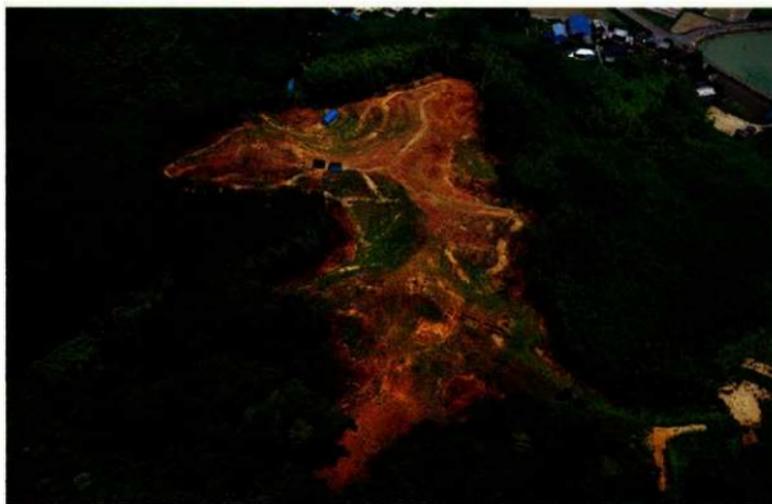


Fig.28 元岡古墳群N群分布図 (1/1,000)



Ph.62 元岡古墳群N群現況全景 (北から)

第30次調査

昨年確認調査を行ったE-2地点の西側を調査対象とした。谷部に6基の伏焼土塼を検出したにとどまった。他の遺構は全く検出されなかった。

伏焼土塼

大小合わせて6基検出したが、出土遺物は全くない。壁が高温で焼かれていることから炭焼き窯と考えられる。



Ph.63 第23次、30次調査全景（東から）



Ph.64 第30次調査全景（東から）



Ph.65 伏焼土塼全景（北から）

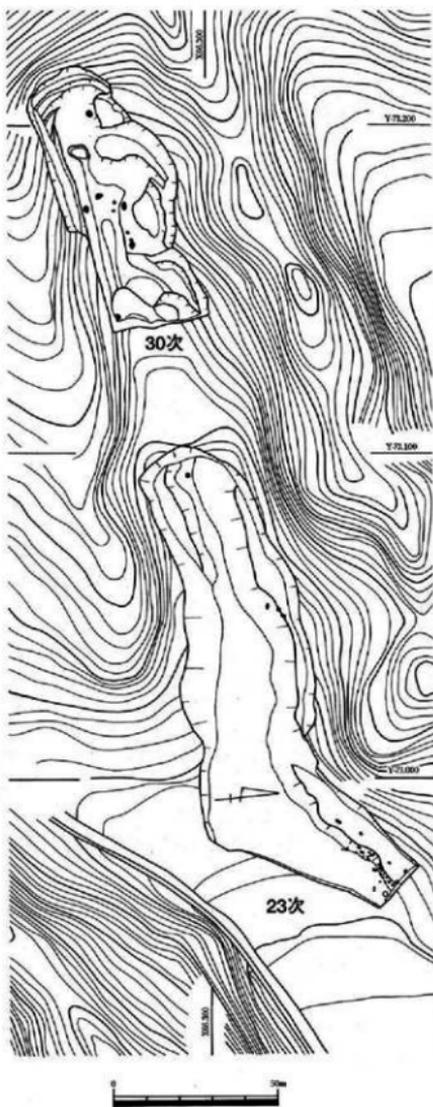


Fig.29 第23、30次調査全体図 (1/1,500)

5. おわりに

九州大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査を実施（平成9年度）してから今年度で6年目、踏査・試掘調査を開始してから9年目を迎えました。調査は九州大学、土地開発公社、都市整備局大学移転対策部、元岡・桑原地区の地元の皆様と協議しながら順調に進行しております。

平成12年度に出版いたしました「元岡・桑原遺跡群調査概報Ⅰ」では第17次調査地点の報告をいたしました。今回は第18次調査地点から第30次調査地点の概要を報告いたしました。特に第20次調査では池状遺構から多量の木簡・墨書土器等が出土しましたのでできるだけ多く掲載しました。これは学術的にも一般の方にも早く公開することが、我々の義務と考えたからです。この

他正式な報告書を随時作成していく計画です。今年度は「元岡・桑原遺跡群2 桑原石ヶ元古墳群」を出版いたしました。

また、今年度からG地区の製鉄遺構確認調査を開始しております。

九州大学におかれましては遺跡の保存に非常に理解を示され、数多くの遺跡を保存し教材として利用される計画をお持ちと伺っておりますが、全国の学園都市の中でもこれほど多くの遺跡を保存しているところはないと言っても過言ではないと思います。

おわりにあたり、日頃から埋蔵文化財調査にご協力いただいている元岡・桑原地区の地元の皆様、九州大学、福岡市土地開発公社、都市整備局大学移転対策部をはじめとする関係各位に厚くお礼申し上げます。

各分野の専門の先生方にはたいへんご苦勞をおかけし、非常に数多くの御指導を仰ぎました。末筆ながら先生方の御名前を記載してお礼に替えさせていただきます。（御名前は五十音順とし、敬称は省略させていただきます）

穴沢義功、岩永省三、小田富士雄、小野山節、大澤正己、岡村道雄、金子浩之、狩野久、神谷正弘、河瀬正利、木本雅康、坂上康俊、佐藤信、潮見浩、柴田博子、白井克也、館野和己、田中正日子、田中良之、玉田芳英、坪井清足、東野治之、中橋孝博、中村順子、永山修一、西口壽生、西谷正、西別府元日、馬場基、林部均、平川南、藤川智之、松井和幸、丸山雅成、溝口孝司、宮代栄一、宮本一夫、村上恭通、森公章、八木充、安田龍太郎、山田良三、山中敏史、山村信榮、横山浩一、古川聡、古川真司、吉村靖徳、渡辺晃宏

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 743 集
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報 2
一元岡・桑原遺跡群発掘調査一

2003 年 3 月 31 日

発行 福岡市教育委員会
(福岡市中央区天神 1-8-1)

印刷 株式会社ゼンリン PX 福岡
(福岡市博多区上牟田 1-18-5)

付 図



調査地点遠景 (南から、左から18次、26次、20次、27次、24次、手前29次)